

追手門学院大学
上方文化笑学センター年報
第1号



2020年度

追手門学院大学 上方文化笑学センター

目 次

寄 稿

私たちの内なる「やぎさん」を思う －「やぎさん ゆうびん」の笑い－……………	鳶野 克己	1
-------------------------------------------	-------	---

活動報告

公文国際学園中等部3年生を迎えて……………	広瀬 依子	7
-----------------------	-------	---

研究報告

日本における疫病とアート……………	木村 未来	9
「ダイバーシティ戦隊・ヤルンジャーズ」……………	大谷 邦郎	17

共同研究報告

笑都大阪の笑いは健在か？現代人が「笑う」形式の研究 追手門学院大学生の「笑い」に関する意識調査4年間（2016年度～19年度）の総括 ……………	高垣 伸博	21
--------------------------------------------------------------------------------	-------	----

2020年度上方文化笑学センター活動記録……………		61
---------------------------	--	----

2020年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧……………		63
---------------------------------	--	----

追手門学院大学上方文化笑学センター規程		
---------------------	--	--

寄稿

私たちの内なる「やぎさん」を思う — 「やぎさん ゆうびん」の笑い—

追手門学院大学上方文化笑学センター客員研究員、立命館大学教授 鷹野 克己

1. 「やぎさん ゆうびん」の相貌

百歳を超えても弛まず創作活動を続けた稀代の詩人まど・みちお（1909-2014）。彼の最もよく知られた作品の一つに「やぎさん ゆうびん」がある。この作品はまた、NHK の子ども向け番組のために曲がつけられ、童謡としても長く親しまれてきた。作品の根底にある発想と着眼を含んだ原形を求めていくと、1939年作の「ヤギサン ユウビン」にまで遡ることができるようだが、幾度かの改作の機会を経て、最終的には以下の形として定着している。

やぎさん ゆうびん

しろやぎさんから おてがみ ついた
くろやぎさんたら よまずに たべた
しかたがないので おてがみ かいた
—さっきの おてがみ
ごようじ なあに

くろやぎさんから おてがみ ついた
しろやぎさんたら よまずに たべた
しかたがないので おてがみ かいた
—さっきの おてがみ
ごようじ なあに

伊藤英治編『まど・みちお全詩集』（新訂版）理論社 2001年

装飾的な技巧を極力排した平易で柔らかな語彙と文体からなる作品であり、その内容も一見したところ単純かつ明快である。大仰な注釈や語義説明などはもとより不要であるが、議論の手がかりとして、ここに描かれた出来事の筋道を、少し詳しくたどってみよう。

しろやぎさんからくろやぎさんに送られてきた手紙。その手紙をくろやぎさんは読まずに食べてしまった。手紙はくろやぎさんにとって大好物の紙でできていたから。でもいったい手紙の中身はなんだったのか。気になるくろやぎさんは、しろやぎさんに手紙の用件を問い合わせるために、しかたなくしろやぎさん宛てに手紙を書き送った。こうしてくろやぎさんからしろやぎさんへ書き送られてきた手紙。ところが、その手紙をしろやぎさんもやはり読まずに食べてしまう。しろやぎさんにとっても同じく、手紙は大好物の紙でできていたから。でも果たしてどうい

う手紙だったのか。自分が出した手紙に対する返事だったのか。気になるしろやぎさんは、くろやぎさんに手紙の用件を問い合わせようと、しかたなくくろやぎさん宛てに再び手紙を書き送ることになる。

まどの作品の大半がそうであるように、この作品も極めて短い。一連は五行で、わずか二連からなっている。しかも、その二連は、見ての通り、手紙の送り手と受け手が入れ替わるだけの違いである。そして、これも彼の少なからぬ作品と同じく、終始ひらがな表記で、圧倒的に平明な言葉のみ用いられている。童謡として歌われるだけあって、子どもと大人を問わず、目にしやすく口ずさみやすいのである。また、題材となっているやぎは、実物を目にすることが日常生活において必ずしも多くないにもかかわらず、「紙を食べる」という流布されたコミカルなイメージとともになんとなく親近感を覚える動物であるといえよう。

これらからすれば、「やぎさん ゆうびん」は、やぎについて私たちに共有された親しみやすいイメージを背景として、なんとも間抜けだが微笑ましい二頭のやぎたちの手紙をめぐるやりとりを、平明な言葉と単純な構成ならではのストレートな伝達力によって描き出した簡易で楽しい短詩のごとく見える。そして、時代や世代を超えて、長く愛されてきたことも頷けるように思われる。しかし、社会の中で他者とかかわりながら生きるという人間の生き方と笑いと結びつきをめぐる、この作品が内包している思想的可能性について議論するためには、もう一歩奥へと踏み込んでいかねばならない。

2. 「やぎさん ゆうびん」のループ構造

用いられる語彙の平明さと提示された構成の単純さが際立つ一方で、すぐに気づかれるように、この作品を構成する二連は、その筋立てにおいて、論理的に永久にループする構造をもっている。作品に描き出されている情景をその字面にそって追っていく限りでは、まず、しろやぎさんからくろやぎさんに手紙が着くところから始まり、その手紙を読まずに食べてしまったくろやぎさんが、届いた手紙の用件を問い合わせるためにしろやぎさんに手紙を書き送る行為をもって前半がおわる。この前半の末尾を承けて、後半は、くろやぎさんからしろやぎさんに手紙が着くところから始まるのだが、届いた手紙を今度はしろやぎさんが読まずに食べてしまう。そして、しろやぎさんがまた改めてくろやぎさんに手紙の用件を問い合わせる手紙を書き送るところで、作品はひとまずの結びを迎える。

だが、このようにしろやぎさんが再び手紙を書き送り、それがくろやぎさんのもとに届くということは、すなわち、最初の連の発端に事態が戻るとことを示している。であるとすれば、くろやぎさんは、その届いた手紙を読まずにまた食べてしまうであろうことが大いに予想される。そうすると、くろやぎさんは、再びしろやぎさんに手紙の用件を尋ねる手紙を書き送るはめになるのである。すなわち、事態は再度第二連の始まりへと進んでいく。そして、くろやぎさんから再び届いた手紙を、しろやぎさんは、やはりまたしても……。

かくして、やぎさんたちの手紙のやりとりは、決して止むことのないループへと突入する。「やぎさん ゆうびん」のほのぼのとした微笑ましい相貌は、このループ構造において見つめ直される時、その印象を大きく変容させ、社会の中で他者とかかわりながら生きることと笑いと結びつきを論じるための重要な契機を提供することになる。平易な言葉と単純な構成がもつストレートな伝達力をなるべく損なわないように注意しながら、このループ構造にかかわって、作品の内奥へとさらに細やかに眼差しを注ぎ込み、描かれている出来事の肉づけを試みてみよう。

上述のように、この作品は、字面の上では、しろやぎさんからくろやぎさんに手紙が着いたところから始まる。しかし当然ながら、手紙が着いたということは、しろやぎさんがくろやぎさんに手紙を書いたということであり、さらに、手紙を書くということは、送り手が相手になにかを知らせたり伝えたりしたいということである。しろやぎさんとくろやぎさんがどういう関係にあるかは、この作品の中心的な関心ではない。なにかを知らせたり伝えたりするために手紙を送ろうとすることができる間柄だということを確認しておけばよい。

着いた手紙は、通常は封が開けられ、中身が読まれることになる。しかし、この場合、そうはならなかった。中身は読まれることなく、手紙は丸ごとくろやぎさんによって食べられてしまう。手紙を受け取ったくろやぎさんは、それが他でもない好物の紙でできていることに目を見張り、おそらく心を奪われたのである。思わず口に運び、気がつけば全部平らげてしまっていたといったところであろう。

では手紙は、くろやぎさんにとって、なにかを知らせたり伝えたりするものとして認識されなかったのか。いやそうではない。届いたものが、好物である紙としての手紙である一方で、同時になにかを知らせたり伝えたりするものとしての手紙であると認識されていたからこそ、くろやぎさんは、届いた手紙の用件を問い合わせる手紙をしろやぎさんに送ったのである。

こうして今度は、くろやぎさんからしろやぎさんに手紙が届く。しろやぎさんは、この作品の冒頭で、既にくろやぎさんに手紙を書き送っている。しろやぎさんが書き送った手紙が、くろやぎさんからの返信を求める内容であったかどうかは定かでないが、そのこと自体はここでは重要でない。先の手紙が返信を待つものであったかどうかにかかわらず、くろやぎさんから届いたこの手紙も、それがなにかを知らせたり伝えたりする手紙というものである限り、通常ならしろやぎさんによって、その中身が読まれるはずである。

ところが、手紙を受け取ったしろやぎさんもまた、くろやぎさんがしろやぎさんからの手紙をそうしたように、読まずにむしゃむしゃと食べてしまうのである。そして案の定、しろやぎさんは、くろやぎさんに手紙の用件を新たに問い合わせるはめになる。もはやいうまでもないが、ここでもくろやぎさんからの手紙を、しろやぎさんはなにかを知らせたり伝えたりするものとして認識していなかった訳ではない。認識していたにもかかわらず、好物の紙としての手紙に心を奪われ、気がつけば平らげてしまっていた。それが用件をもつ手紙であることがしろやぎさんに認識されていたからこそ、その用件を問い合わせる手紙をくろやぎさんに書き送るのである。

しろやぎさんからくろやぎさんにこうして再び届いた手紙。前回、手紙を読まずに食べてしまったくろやぎさんであったが、今回もなんと同じ轍を踏んでしまう。そしてやむを得ず再びしろやぎさんに問い合わせの手紙を送ることになる。しかし、手紙を受け取ったしろやぎさんもまた、どういう訳か、くろやぎさんと同様に、同じ轍を踏むのである。こうして踏み始められる同じ轍は、それぞれに永久に踏み続けられていく。二頭のやぎさんは、今日もまた互いに手紙を書き送り続け、届いた手紙を読まずに食べてしまい続ける。「さっきの おてがみ ごようじなあに」。この問い合わせは、回答が得られないまま、互いに永久に繰り返され続ける。

3. 「やぎさん ゆうびん」へのツッコミ

「やぎさん ゆうびん」の有するループ構造をやや立ち入って見てきたが、このループ構造の成立の仕方に関しては、いわゆる「ツッコミどころ」が以下のように容易に指摘できる。

まず思いつくのは、やぎさんたちは、相手に食べられてしまう可能性のある紙の手紙をなぜ送るのかという点であろう。すなわち、重要なことを知らせ伝えたいのであれば、食べられる心配のない別の手段や方法を用いるべきだということである。次に、そもそも相手に送ろうとして紙の手紙を書いている時点で、その手紙をまず自分が食べてしまうはずではないかという点も指摘できる。つまり、相手から来た手紙は中身も見ずにすぐ食べてしまうのに、なぜ自分が書いている際には、食べるのをこらえることができるのか、あるいは食べることに思い至らないのかということである。さらに指摘しうるのは、二度目の手紙のやりとりで、なぜ二頭とも見事に同じ轍を踏んでしまうのかということである。すなわち、最初の失敗を踏まえて、今回は、届いた手紙を食べないように注意を払うことや、中身を読み終えてから食べるということをなぜしないのかという点である。最初に着いた手紙を読まずに食べてしまったことの失敗を記憶していないのか、あるいは記憶していても、好物の手紙を前にして食べることをこ

らえることができなかつたのか。いずれにせよ、やぎさんたちが、経験から一切学ぶことなく、同じ轍を繰り返し踏み続けるというのは全く腑に落ちないという訳である。

これらはいずれも、もっともな指摘、理に適った「ツッコミ」であるとはいえよう。ここに挙げた「ツッコミ」を介して、私たちは、「やぎさん ゆうびん」の平易で柔らかな語彙と文体の背後から浮かび上がってきた手紙のやりとりをめぐる永久ループを、作品中のやぎさんたちが本来引き込まれる必要のない、はまらなくてもよいループとして、排し遠ざけることが可能である。そしてさらには、この排し遠ざける行為の中に「やぎさん ゆうびん」における一つの笑いの可能性が現れてくるのを指摘することができる。それは、論理的にはやや肌理の粗いループにはまった作品中の当のやぎさんたちからすれば極めて切実で真剣であっても、客観的にはコミカルに映る手紙を送り合う行為の反復に面しての、ある種の突き放した笑いであり、高みから対象を見下ろすような笑いであるといえる。

送ったら相手が食べてしまうであろうことが予想できる紙の手紙を使い続ける鈍感さ。届いたら中身も読まずに食べてしまうという同じ失敗を繰り返す愚かさ。届いた手紙はすぐに食べてしまうのに、なぜか送るために書いている手紙を食べることに思い至らないという間抜けさ。これらのことに面して生じる笑いは、その対象の瑕疵や欠点、不十分さや至らなさを笑うのである。そして、笑う主体自身はそうした瑕疵や欠点、不十分さや至らなさとは無縁の存在であると自任している。すなわち、自分なら、やぎさんたちのような鈍感さに埋没しないし愚かな反復はしない、やぎさんたちは間抜け極まりないという訳である。笑う主体が対象より優位に立って、対象の愚かさを笑うこういった笑いは、いわば、ポップズ流の「優越の笑い」である。しかし、「やぎさん ゆうびん」に接しての私たちの笑いは、「優越の笑い」に尽きるであろうか。この作品におけるやぎさんたちは、私たちとは無縁の鈍感で愚かで間抜けな、専ら笑い見下ろすべき存在であろうか。私たちは、「優越の笑い」の圏域を突き抜けて、「やぎさん ゆうびん」に見出しうる笑いの可能性の核心に迫らねばならない。

4. 「やぎさん ゆうびん」における笑いの核心

「やぎさん ゆうびん」のやぎさんたちは、以前の失敗を記憶にとどめない、もしくは経験から学ばない。いやあるいは、学んではきたのだが、いざ紙の手紙を前にすると、自制も我慢もきかなくなるとでもいうのであろうか。届いた手紙を我知らず頬張っている。そして、気がつけば、もう胃袋の中におさめてしまっている。なんと愚かなことか。だが、どうであろう。私たちは、こうした「わかつてはいるけれど、如何ともし難く、繰り返ししでかしてしまうという愚かさ」と果たして本当に無縁であろうか。

「やぎさん ゆうびん」におけるやぎさんたちの行動は、愚かといえれば紛れもなく愚かである。送られてきた手紙を、読まずに食べてしまうことは愚かである。そして、読まずに食べてしまったことの失敗を次回に活かさないことも愚かである。そもそも、食べてしまいたくなるような紙で手紙を書くこと自体が、なんとも愚かしい。やぎさんたちの個々の行為に伴うこのような愚かさに面して、私たちは、「私は、決してこんな愚かなことはしない」とさしあたり胸を張れそうに思われる。だが、ほんの少し立ち止まって、今ひとたび考えてみたい。

私たちは、社会の中で他者とかかわりながら、さまざまな役割を担い課題を抱えて、日々を生きている。そして、それぞれの役割を遂行し課題を達成するために、私たちは努力もし、工夫もしている。そうした日々の生きる営みにおいて、ある役割は遂行でき、ある課題は達成できた一方で、遂行しきれなかった役割や達成できなかった課題がある。もし、役割を遂行し課題を達成することこそが、私たちが生きることにとって最も重要な意味をもつのであれば、役割遂行や課題達成を妨げるような選択は確かに愚かである。私たちは、そのような愚かさを退け、合理的で賢明な行為を選択し続けねばならない。この視点に立つとき、例えば、「やぎさん ゆうびん」におけるや

ぎさんたちが、届いた手紙を読まずに食べるという同じ失敗を繰り返すことは基本的に愚かであり、そもそも食べられてしまう可能性をもつ紙の手紙を書くことが、まずもって出発点から愚かであると断言することもできる。

こうした断言に与し、人生における愚かな選択を退け続けることを通してこそ生きることを確信できるとする限り、私たちは、やぎさんたちの愚かさに対して優位に立って、彼らを笑い突き放すことはできても、彼らに寄り添い、彼らの愚かさに関心し、彼らと抱擁し合うことはできないであろう。役割遂行や課題達成への関心が、私たちの日々の生活にとって重要であることを、ここで否定するのでは毛頭ない。しかしながら、私たちが、社会の中で他者とかかわりながら生きていることの奥底には、そうした関心に基づいて日々の行為を合理的効率的に吟味し点検するような作業を通しては決して測りきれない掴みきれないものが、深く大きく抱え込まれているのではないか。外部から客観的に見れば、まさしく愚かで退けられるべき行為と見えるものの中に、こういった測りきれない掴みきれないなにかに触れる契機が潜んでいるように思われてならない。

役割の遂行と課題の達成を目指して努力と工夫を重ねても、社会の中で他者とかかわりながら生きている中では、おさまりがつかない出来事やまともきらない事象が、如何ともし難く予想を超えて生じてくる。それはきっと、「やぎさん ゆうびん」のやぎさんたちだけの問題ではない。であればむしろ、「なんともおさまりがつかんなあ」、「どうにもまとまらんなあ」、「なんとかけじめをつけようにも、つけきれんなあ」、「どうにか帳尻を合わせようとしても、合わせきれんなあ」といったやるせない思いを味わい続け、実ることがないと半ば気づきながらも努力と工夫をやめないことこそが、私たちが他者とかかわりながら生きていることの紛れもない証しなのであろう。その味わいは決して甘くはないが、味わい続けるほどに、その苦みと渋みから滲み出てくるような襲の深い笑いを思い描けるのではないか。

私たちは、往々にして、賢明な振る舞いと愚かな振る舞い、達成した課題と頓挫した課題の多寡によって人生の成否を比べ合い、優位性を競い合う。その比べ合いや競い合いの中に囚われている限り、私たちにとって、やぎさんたちは、私たち自身とは無縁のないしは退けられるべき愚かな落伍者であり、その際限ない手紙のやりとりは微笑ましくはあっても、畢竟「優越の笑い」の対象に過ぎないように見える。

しかし彼らは果たして、私たちにとって、そうした「優越の笑い」の対象である愚かな落伍者であろうか。いくら想像を交えつつ、改めてやぎさんたちの振る舞いに目を向けてみる。彼らもやはり、おそらくそれぞれの役割と課題を背負い、黙々と日常の暮らしを営んでいる。知り合いではあろうが、日々の生活の中で、互いに成否を比べ合うでも、優位性を競い合うでもない。ただ互いに知り合いとして、知り合いに相応しく、相手に関心を向け、相手を慮り、生じた用件を伝える手紙を書く。たまたま、まずしろやぎさんからの手紙が着くことになっているが、作品の論理構成からすれば、どちらのやぎさんが最初でもかまわない。そして件のループが始まる。届いた手紙は読まれず、常に食べられてしまい、「さっきの おてがみ ごようじ なあに」と相手に問い合わせる手紙が出され続ける。どちらのやぎさんも、相手からの手紙を心待ちにしながら、いざ手紙が届くと、読まずにいつも食べてしまうのである。ひたすらこの繰り返しである。

やぎさんたちの振る舞いは、虚しく不毛であろうか。伝わるべき情報が伝わらないという点でいうなら、そうであろう。しかし、知識や情報を正確に効率的に伝え合うということだけを目指して、私たちは他者とかかわるのではないであろう。生きた人間としての自己と他者とかかわりは、理解可能な知識や情報の単なる送り手と受け手の関係ではない。他者は、知識や情報という形での授受や交換の彼方にあるものに私たちを気づかせる存在なのである。とすれば、「やぎさん ゆうびん」におけるやぎさんたちの永久に伝わらない手紙のやりとりは、私たちが他者とかかわりながら生きている上で、否応なく直面する「なんともおさまりがつかないもの」、「どうにもまとまらんもの」の象徴であるとする事ができる。こうしたやぎさんたちの姿を通して、人間としての私たちは、他者とかかわりながら日々生きているということそれ自体が、根本的原理的に、測りきれない掴みきれないなにかを例外なく抱え込み、瑕疵や欠点、不十分さや至らなさに満ちているという痛切な感覚を互いに分かち合うことができ

るのではないか。

この分かち合いが実現する場においては、私たちはもはや、やぎさんたちの行為を、私たち自身とは無縁のないしは退けられるべき愚かさのもとに位置づけたりしない。やぎさんたちは私たちにとって「優越の笑い」の対象であることをすでに超えている。むしろそこでは、繰り返される手紙のやりとりの中で、生きていることにおける如何ともし難いやるせなさの味わいからにじみ出た笑いを、やぎさんたちはじつは密やかに笑っているのではなからうか。そのとき、「やぎさん ゆうびん」のやぎさんたちとは、とりもなおさず、私たち自身のことなのである。

公文国際学園中等部3年生を迎えて

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・国際教養学部講師 広瀬 依子

2020年12月10日午後2時から午後4時まで、公文国際学園（神奈川県横浜市）中等部3年生28名が当センターを訪れた。同校は中高一貫教育を行っており、中3・高1の2年間を「充実期・グリーンゾーン」と名付けている。目指すのは「視野の拡大」「主体的な学びの姿勢の確立」だという（同校パンフレットより）。その一環として現地へ出向く企画「日本文化体験」が設けられている。今回来訪の生徒さんたちのテーマは「笑いで人を幸せにする」。笑いを今とは違う方法で役立たせたい、そのための方法を探したい。また、大阪の人のフレンドリーさを実際に体験したい等の趣旨のもと、3泊4日で関西圏を巡る中、センターも来訪先のひとつになったというわけだ。

会場は総持寺キャンパス A131 教室。センターからは高垣所長、辰本所員、広瀬所員の3名が出席した。センター・中学生とも参加者全員が互いに距離を取り、消毒を行い、マスクを着用し、新型コロナウイルス感染拡大防止策をとった上で開催した。

まず初めに、高垣所長、辰本所員、広瀬所員がそれぞれ自己紹介を兼ねてセンターと各自の研究について述べた。その後、参加した生徒さんから質問を募り、それに回答するかたちで進行していった。

この質問内容と傾聴・発言姿勢の優れていることに、われわれ3名は大げさではなく驚嘆した。こちらの発言時にはじっと耳を傾けて意識を注ぎ、メモを取る。自らの発言時には内容をコンパクトにまとめてわかりやすく話す。本当に中学生？ 高校生ではないのか？ と、思わず書類を見返したほどである。

その質問内容の一部をご紹介します。

- ・関西人は生で漫才を見ることが多いと聞く。笑いが将来に与える影響はあるか。
- ・昭和の笑いとは近年の笑いを比べて、近年の笑いをどう評価しているか。
- ・笑学研究を始めて、笑いに対する意識は変わったか。
- ・センターが行ったアンケートの分析に「言葉に興味を持ち、人に興味を持ち、自信を持てるような教育方法を考える必要がある」と書かれていた。具体的にどんな教育方法があるか。
- ・海外の笑いには叩く文化がないが、なぜ日本にはあるのか。
- ・世界に何かを発信する時、笑いが壁になると思う（筆者註・どんな言葉や状況が笑いを呼ぶかは、国や民族によって違うため）。どうやって乗り越えたらよいか。
- ・人を傷つける笑いとはそうでない笑いとの線引きはどこか。
- ・笑いは「変」でもある。笑いとは恐怖につながりはあるか。

こちらがたじろいってしまうほどの鋭さを秘めた質問もあり、大いに刺激をいただいた。コロナ禍でなければ、たとえば生徒さんを3グループに分け、所員が1人ずつ参加して少人数での意見交換ができたかもしれないと考えると残念である。しかし、この状況下、関西まで来訪されたのは嬉しいことであった。

後日、生徒さんと引率の先生からいただいたお礼状によると、今後、笑いをテーマにした論文を各自でまとめられるとのこと。今回の訪問が、さらに考察を深める一助となるならば嬉しい限りである。

日本における疫病とアート

上方文化笑学センター客員研究員、国際教養学部非常勤講師 木村 未来

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症が拡大するなかで注目されたのが、「アマビエ」だった。江戸時代のかわら版に登場した妖怪である。疫病の流行を予言し、自分の姿を写したものを人々に見せよと言った、という言い伝えが SNS で注目を集め、ネット上にイラストがあふれた。関連グッズが次々に生まれ、厚生労働省も新型コロナの感染防止を呼び掛けるキャラクターに採用するなど、社会現象となった。2020 年度春学期に、「日本学ワークショップ」の講義で取り上げたところ、学生の注目も高かった。この「アマビエ」以外にも、日本人が疫病といかに向き合ってきたのかを伝えるアートがある。古代から現代にかけての、そうしたアートを見つめてみたい。

【1】アマビエ現象

1. 2020 年 3 月はじめごろ、妖怪、アマビエの様々なイラストがツイッターに投稿されるようになった。

新型コロナウイルス感染症が拡大するなか、インターネットで、江戸時代後期、1846（弘化3）年 4 月中旬のかわら版に登場したアマビエが話題になったことがきっかけだった。

かわら版にはアマビエの図とともに、こう記されていた。

肥後国海中江毎夜光物出ル 所之役人行
見るニ づの如之者現ス 私ハ海中ニ住アマビエト申
者也 當年より六ヶ年之間 諸国豊作也 併
病流行 早々私ヲ写シ人々ニ見セ候得と
申て海中へ入り 右ハ写シ役人より江戸江
申来ル写也

弘化三年四月中旬



図版 1 「肥後国海中の怪（アマビエの図）」
（京都大学附属図書館所蔵）

肥後国（熊本）の海に、夜な夜なアマビエが現れ、「これから6年間は豊作だが、病気がはやる。私の姿を写して人に見せよ」と言って消えた、という意味合いだ。ちなみに、1858（安政5）年から1862（文久2）年にかけて、全国的にコロリ（コレラ）が流行し、死者が数万人にも及んだが、この時、アマビエの姿の摺り物が多数、販売されたという。

かわら版に掲載されたアマビエを知った若者らの間で、「（アマビエの）姿を写して見せよ」という言葉に従えば、新型コロナウイルス感染症がおさまる、疫病退散の効果がある、と話題になった。イラストレーターらが、かわら版の図柄から想を得てアマビエを描く投稿が増え、拡散された。

3月中旬には、水木プロダクションが、「現代の疫病が消えますように」との願いを込めて、漫画家の水木しげる氏（1922～2015）が描いたアマビエのモノクロ版、カラー版の原画をツイッターに投稿し、大きな反響を呼んだ。

水木氏が半世紀以上、暮らし、名誉市民でもあった東京都調布市も、水木プロに依頼し、市のホームページにオンライン会議の背景などに使える原画を公開。市の想定を大きく超えるアクセスがあった。

水木しげる氏は、1984年発行の『水木しげるの続・妖怪事典』（東京堂出版）に、自らが描いたアマビエを掲載したのをはじめとし、『日本妖怪大全』（講談社）、『日本妖怪大事典』（角川書店）などにも収録。人気のテレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」にも、鬼太郎の仲間として登場させていた。

こうしたことが、アマビエが広く注目されるきっかけになった。

厚生労働省も、新型コロナウイルス感染防止を呼びかける啓発アイコンにアマビエを採用した。



図版2 厚生労働省が新型コロナウイルス感染防止呼びかけのため作成した啓発アイコン
(厚生労働省ホームページより転載)

2. こうした現象を受けて、2020年度の春学期の講義「日本学ワークショップ」で、アマビエを取り上げたところ、学生らが、アマビエと同様に、豊作や疫病の流行を予言し、疫病退散にご利益があるとされる「予言獣」を調べ、発表した。以下に、説明を加えて示す。

① 神社姫（じんじゃひめ）

江戸時代の医師、加藤曳尾庵が著した随筆『我衣』に、1819（文政2）年、備前国の海岸に頭に角を持つ人魚が現れ、「竜宮からの使者の神社姫だ」と名乗り、「この年より7年は豊作になるが、虎狼痢（コロリ、コレラ）という病が流行する。私の姿を写して描いた絵を見れば、病難を免れ、長寿を得られるだろう」と告げて去った、と記されていた。この年には赤痢が流行し、神社姫を写した絵が多くの家庭で掛けられたという。



図版3 神社姫

©水木プロ（『日本妖怪大事典』、画／水木しげる・編著／村上健司、角川書店、182ページ）

② 姫魚（ひめうお）

江戸期文政のはじめ頃、備前国（佐賀・長崎）の平戸の浜に奇妙な魚「姫魚」が現れ、疫病、虎狼痢（コロリ、コレラ）の流行を予言し、「私の絵を家に貼れば、コロリにかからない」と告げて海の中に消えた、とされる。京都にあった奇談研究会「以文会」の議題を記録した『以文会随筆』＝1823（文政6）年、水野皓山編＝収録されている。虎狼痢除けのおまじないとして、絵を売り歩く人もいたとされる。



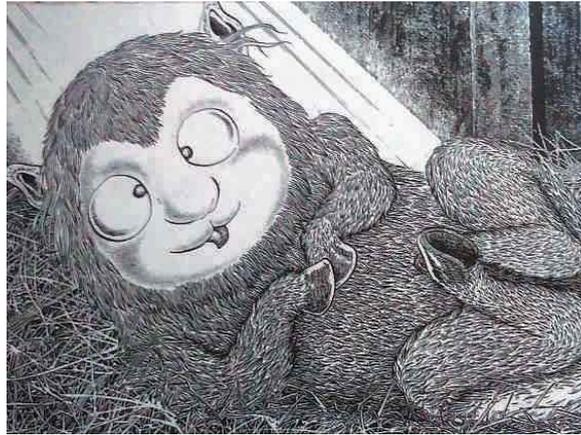
図版4 姫魚

（西尾市岩瀬文庫所蔵、西尾市岩瀬文庫ホームページより転載）

③ 件（くだん）

「にんべん」に「牛」と書く「件」の漢字が示す通り、人と牛が一体となった姿の妖怪で、江戸時代から出現したという記録が見られる。生まれるとすぐに予言を行い、数日で死ぬとされる。

豊作、凶作とともに疫病の流行を予言し、厄除けには自らの絵を貼っておくようにと伝える。明治時代には、日露戦争を予言し、昭和の太平洋戦争時には終戦を予言した、とも伝わる。



図版 5 件

©水木プロ（『日本妖怪大事典』、画／水木しげる・編著／村上健司、角川書店、126 ページ）

④ クタベ

江戸末期、越中の立山に現れた、と伝わる妖怪、クタベ。人面の丑で、腹部の両脇に眼を持つ姿で現れ、立山に薬種を採りにきた人に、疫病の流行を予言し、「私の姿を見れば難を逃れられると話した」という言い伝えが広まった。



図版 6 クタベ

©水木プロ（『日本妖怪大事典』、画／水木しげる・編著／村上健司、角川書店、125 ページ）

疫病をもたらすものが何なのかがまだ解明できていない時代に、疫病退散にご利益があるとされる「予言獣」の姿をユーモラスに表現することで、疫病に対する恐怖感が薄れ、安心感を得られる意味合いがあったからこそ、こうした多様な予言獣が登場したのではないかと、調べた学生らは結論づけた。

[2] 江戸時代以前

こうした「アマビエ現象」を機に、日本人が疫病にどう向き合ってきたのかをたどってみよう。

1. 奈良時代

法隆寺の国宝「釈迦三尊像」は、聖徳太子（574～622）の病からの回復を願って、聖徳太子をモデルに造られたとされている。光背裏面の銘文には、「聖徳太子の病氣平癒を王后王子らが願い、しかしお亡くなりになったので、太子の往生を願い造った」とあるうえ、621年には聖徳太子の母、622年に聖徳太子、さらに聖徳太子の夫人も死去したことが刻まれており、疫病だったのではないかと考えられる。聖徳太子と等身とされる「釈迦三尊像」には、病の治癒を願う祈りの心があふれている。

2. 平安時代から鎌倉時代

それまで、病気は目に見えない何かによってもたらされるもの、と考えられていたが、平安時代になると、疫病を視覚化しようとする表現がみられるようになる。例えば、「辟邪絵」。疫病をはやらせる悪神「疫鬼」を懲らしめるよい神さまを表す。奈良国立博物館が所蔵する国宝「辟邪絵 天刑星」には、疫病を退治する天刑星が描かれている。天刑星には4本の腕があり、小さな鬼を次々とらえて、画面左下のお酢に浸した後、食べている。小さな鬼たちの哀れな表情が印象的だ。疫病を具体的な造形として示し、表現することで、安心につなげようとしたのだ。

このように、疫病は、「鬼」として描かれていく。

「融通念仏縁起絵巻」（清凉寺本）では、入り口に、疫病を表す「鬼」たちがやってきた様子が表現されている。奥では、人々が念仏を唱えているのだが、家の主である男が、鬼たちに巻物を見せている。そこには、念仏を唱えている人々の名が記されており、鬼たちは、念仏の功德に心を揺り動かされ、一人ひとりの名の下に「この人には悪いことはしない」とサインして退散していく。神仏の力によって、「鬼」の姿をした疫病を払いのけることが可能であることを、「融通念仏縁起絵巻」は示している、といえよう。

「鬼」の呼び方は「化け物」、そして「妖怪」へと変わっていき、多様な「妖怪」が生まれていった。

3. 江戸時代

江戸時代、疱瘡（天然痘）が流行した。ウイルスによる飛沫や接触で感染し、生命の危険にさらされたり、治癒しても痘痕が残ったり、失明したりすることもあったが、当時は、疱瘡神と称される疫病神が取りつくことによつて発病する、と信じられていた。そこで、感染しないように、たとえ感染しても重くならないように、との祈りを込めて、門や家の中に貼ったり、病人の枕元に置いて護符代わりに用いた木版画が「疱瘡絵」だ。

古来より疫病や災難除け、魔除けに効果があるとされる赤一色で摺られることが多く、「赤絵」とも呼ばれた。疱瘡をもたらず神が恐れ、退散するようにと、桃太郎や金太郎などの英雄や豪傑などを描いたり、全快するようにとの願いを込めて、縁起ものである鯛などが描かれたりした。病が回復すると焼き捨てたり、川に流したりしたため、現存するものは少ない。歌川国芳ら浮世絵師も手掛けている。

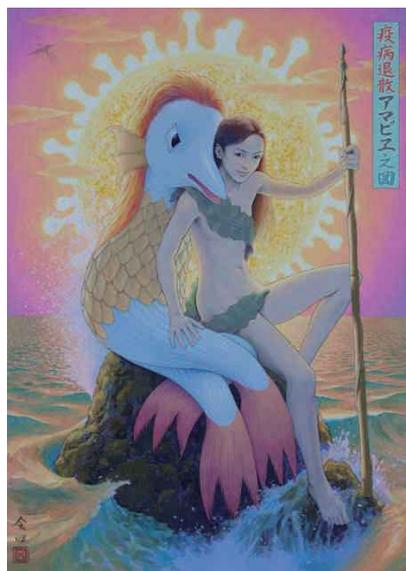


図版7 「金太郎の猪退治」
東京都立中央図書館特別文庫室蔵

【3】 現代

1. 「アマビエ・プロジェクト」

埼玉・所沢の角川武蔵野ミュージアムでは、「アマビエ・プロジェクト～コロナ時代のアマビエ～」が実施されている。6人の美術家が参加し、リレー形式で、アマビエをモチーフにした作品を展示。今年10月末まで開かれる。第1弾として会田誠の「疫病退散アマビエ之図」原画と、縦5メートル、横3.6メートルの巨大バージョンを展示した。会田は、アマビエの伝承からイメージを膨らませ、アマビエと海の民が交流する様子を表現、背景に、太陽のようでも、新型コロナウイルスの電子顕微鏡画像のようでもある図柄を配した。



図版8 会田誠「疫病退散アマビエ之図」
(2020年 パネル、アクリル絵具、色鉛筆 103 × 72.8cm ©AIDA Makoto Courtesy of Mizuma Art Gallery)

2. 横尾忠則氏

現代美術家、横尾忠則氏は新型コロナウイルス感染症をテーマにした連作「With Corona（ウイズ・コロナ）」を制作し、ツイッターなどで発表を続けている。べろりと舌を出した赤い口の図柄をプリントした「ペロだしマスク」を自身、あるいは自作絵画に描かれている人物や、雑誌、写真などに登場する人物や動物の顔に貼り付ける。必要以上にコロナ感染を恐れず、コロナと共生しながら制作していこうという思いを、アイロニカルに、そしてユーモラスに伝える。



図版9 横尾忠則「With Corona」
(2020年)

3. 森村泰昌

現代美術家、森村泰昌氏は、大阪・北加賀屋の私設美術館（morimura@museum）で昨年、新型コロナウイルス感染症が拡大する現在の日常を見つめる作品展を開催した。モナリザに扮した自らの肖像写真に、文字入りのマスクを重ねた作品や、自らがマスクをつけてパフォーマンスをする映像作品などで構成。フランス生まれの美術家、マルセル・デュシャンが、モナリザのカードにひげを描き入れた作品に通ずるこうした作品を通して、コロナ対策に懸命に取り組む人々の姿と、その内面の声を伝えるかのようなメッセージを暗示することによって、コロナ禍の時代に、冷静なまなざしを向ける姿勢がうかがえた。作品間の距離も2メートルとったり、逆に複数の作品を密集させたりすることで、現代を生きる人々がおかれた状況を、客観的に見つめなおそうと提案。鑑賞者に自らの行動について自問を促すようだ。



図版10 森村泰昌「マスクをつけられたモナリザ1」
(2020年)

【終わりに】

日本では、古代から中世にかけては、疫病からの回復を願う祈りの心、あるいは、目に見えない疫病そのものが、視覚化された。近世においては、そこから一歩進み、疫病から逃れ、重症化しないですむ護符として役割を果たす表現が数多く登場した。

その一つが、コロナ禍において注目を集めたアマビエだ。

アマビエが話題となるなかで、日本の現代美術家らは、アマビエから着想した美術作品を手がけ始めた。新型コロナウイルス感染症が、世界的に流行する現状を、美術表現を通して客観視してみよう、とも呼びかけた。

疫病がいかにもたらされ、いかに広がるかが、明らかになっていない段階では、造形化によって、人々の不安感を払しょくする。一方、現代においては、新型コロナウイルス感染症拡大の恐怖感の渦中にある人々に、一歩ひいた視点から現状を認識するまなざしを示す。

こうしてたどると、日本では古くから、いかに疫病と共生するか、という視点で知恵をしぼってきたことが分かる。これは、まさに、新型コロナウイルスと共に生きることを前提に、暮らしのあり方を見つめ直し、変えていこうとする「ウィズ・コロナ」の言葉にも受け継がれている考え方であろう。

そうした「ウィズ・コロナ」の時代に、今後、どのような美術表現がなされていくのかを、さらに見つめていきたい。

※画像、図版の二次使用を禁じます。

「ダイバーシティ戦隊・ヤルンジャーズ」

追手門学院大学上方文化笑学センター客員研究員 大谷 邦郎

他の先生方の内容の濃い、かつ格式高いご寄稿の中で、毎度毎度申し訳ないのですが、「箸休め」的に、小生の拙文にもお目を通していただければ幸いです。その内容はたとえば小生がライフワークとして活動しております障害者支援の中で、このコロナ禍において見聞きした「笑い」にまつわるエピソードをご紹介します。いただきます。

皆様のご研究において、某かの参考に少しでもなればと思いますが……これっぽっちも参考にはならないかなあ。(汗)

さて、表題の「ダイバーシティ戦隊・ヤルンジャーズ」ですが、その名前は既にお分りの通り、映画「アベンジャーズ」からインスピレーションを受けて頂戴したもの。確かに軽い思いつきで2019年の末に結成した“戦隊”ではありますが、その活動の目的は「ダイバーシティの啓蒙・普及」と言う至極真面目なものであります。メンバーはと言うと、本家「アベンジャーズ」に習って、様々な“能力”を持つ面々に参集してもらいました。



まず、発達障害の当事者でありながら、同じ障害のある仲間たちのサポートを行う自助グループの代表に、手話エンターテイメント発信団・oioiと言う、最近ではちょくちょくメディアにも取り上げられている「手話パフォーマンス」の集団、そして、両足が不自由なのにもかかわらず腕だけで壁を登っていくと言うパラ・クライミングの日本チャンピオン、さらに、出産時の介助だけでなく女性の一生に寄り添うお仕事・助産師の皆さんがメンバーです。こうした彼ら彼女らとともに、様々な価値観を認め合おうと言う「ダイバーシティ」の啓蒙や普及活動を、イベントや研修を通して行っています。しかし、流石に2020年はコロナ禍により思った活動はなかなか出来ませんでした。イベントや試合・選手権の中止、研修やセミナーの延期など。その結果、メンバーたちとの情報交換も一時全く出来ない時期があり、特に障害のある仲間たちの健康状態や、精神状態が大変心配されました。確かに大きなダメージを受けた面も多々ありますが、彼らは強かった。彼らが、笑いながら教えてくれたコロナ禍の功罪をご報告していきましょう。

まず、手話エンターテイメント発信団・oioiの話から。この手話パフォーマンス集団に関しては、前回の研究会報告でもご紹介させていただきましたが、十数年前に耳の聞こえない仲間たちと、耳の聞こえる仲間たちとが一緒になって、誰の心にも巣くう偏見だとか差別と言った“バリア”を、手話歌や手話ダンス、さらに手話コントを通してぶっ壊すと言う理念を基に成立された団体で、大阪を本拠に活動しています。従来のお堅いイメージのある手話ではなく、身体全体を使った明るくて楽しい手話パフォーマンスが人気を呼び、最近ではNHKの教育テレビジョン・Eテレなど様々なメディアで取り上げられることが多くなりました。しかし、聴覚障害のあるメンバーは、このコロナ禍では、コミュニケーションがますます難しくなっています。と言うのも、彼らの多くは、補聴器の助けを借りながらも、相手の口を“読んで”話を理解していることから、誰もがマスクを付けている今は、口元が見えず、話が“読めなくなる”からなのです。とは言え、彼らもこう言います。「このご時世、流石に、マスクを取って話してくれ!とは言えない」と。そこで彼らは、こう注文するのです。「まずは、こっちをシッカリ見て欲しい」と。「こっちが、理解出来ているかいないかを見て確認して欲しい」と。そして、さらに「マスクで隠れていない部分、特に目で語ってほしい」と。なるほど!確かに「目は口ほどにモノを言う」のですから、聴者同士の会話においても心掛けたいコミュニケーションの方法ですよ。また、こんな注文もしています。「web会議サービスを使う際に、周囲に人がいない場合は、マスクを外して欲しい」と。彼らは、音声のみの電話は苦手ですが、顔が見えるweb会議サービスであれば、マスクさえ外してもらえるのであれば、コミュニケーションはグ〜ンと楽になります。このweb会議サービスが一挙に普及したのは、彼らにとって、コロナ禍の功罪の“功”の部分だと言えます。しかし、それは一対一で、あるいは、せめて三人程度の参加者であれば、と言う条件が付きます。なぜなら、大勢が参加するweb会議の場合は、喋っている人にまず気付いて、その人の方を見て、口元を読んで、初めて話の内容が理解出来るからです。参加者があまりに大勢の場合は「えっ?今、誰が喋っているの?」と探している間に、その人の話が終わって、結局、何が話されていたか分からないと言うケースもよくあるそうです。そこで、「発言者は、まず手を挙げてから話始めて欲しい」と言います。しかし、これも聴覚障害者に限らず、聴者の我々にだってあること。web会議では手を挙げてから発言すると言うことは、聴者にとっても、誰にとっても優しい気配り。これこそがダイバーシティの考え方なのです。

ところで、そんな彼らが、このコロナ禍で一番喜んだのは「手話」への認知度がアップしたことです。政府関係者や自治体の首長の会見には、必ず手話通訳者が付くようになり、テレビの中継でも必ずその手話通訳者を画面に入れ込む配慮がされるようになったことを、彼らは本当に喜んでます。そして、その「手話」そのものに、聴者も関心・興味を持ちだしたことを大いに喜んでます。何故、聴者も手話に興味を持ちだしたか?それは飛沫防止のために大きな声で話せなくなった今、声を出さずにコミュニケーションが取れる手話の便利さに気付いたからです。そこで彼らが今、それこそweb会議サービスを使って行う「オンライン手話講座」は大変高い人気を呼び、多

くの聴者が、そこで学んでいるのです。さらに、この手話を学ぶことによって得られることは、ただ単に手話を覚えることではなく、表情やジェスチャーの重要性を学ぶことにあります。コロナの感染拡大が続く中、他者とのコミュニケーションを取る際に、「webで」と言う比重は、今より増えることはあっても、減ることはないでしょう。しかし、リアルなコミュニケーションと比べて、伝わりにくさがることは否めません。そこで、声だけでなく、重要になってくるのが表情やジェスチャー。手話では、その部分も重要な要素なので、普段より少しオーバーに、いわゆる「盛る」ことが求められています。そこで、手話を学ぶことで、web上でのコミュニケーション能力が上がると言われているのです。彼らは言います。「今こそ、手話を広めるチャンスです」と。この前向きさを、我々も学びたいと思います。

そして、もう一つのエピソードをご紹介します。それは発達障害の仲間たちに関する話題です。発達障害は、予想しなかった事態が起こった場合や、新しい環境に対応するのが苦手。よって、今回のこのコロナ禍で大きなダメージを受けているのではと心配になり、発達障害の仲間たちを募って「web飲み会」ならぬ「web茶話会」を開催しました。皆さんどれだけ落ち込んでいるだろうかと思っていたんですが、何と全員、実に素敵な笑顔を見せてくれたのです。それは何故か？それは、皆さん全員在宅勤務でテレワークだったからです。では何故、在宅勤務でテレワークだったら、皆さん笑顔になれるのか？それは、発達障害の特性の一つにコミュニケーションが苦手と言うことがあるので、職場であれば周囲の方々に気を遣わなければならないのが、在宅であれば一人で黙々と仕事が出来、効率が上がったからだと思います。彼らにとっては、このコロナ禍での仕事の環境は、決して悪いものではなかった……どころか、実に心地よかったと言うのです。なるほど。当たり前のことではありますが、物事は多面的に見なければならぬのです。

しかし、もちろん、このコロナ禍で発達障害者ならではの困ったこともあります。それは、聴覚障害者と同じ「マスク」を巡っての問題です。但し、マスクをしている人の口元が見えないから困ると言う聴覚障害者とは異なり、そもそもマスクが付けられない、と言う問題が顕在化してきたのです。このご時世、マスクを付けない人は白い目で見られるだけでなく、店舗に入ることが出来ない、タクシーなどの乗り物に乗ることが出来ないなどの現実的な不利益を被ることがあるにもかかわらず、マスクを付けない発達障害の仲間たちがいるのです。それは何故か？それは、発達障害の特性の一つに「感覚過敏」と言うものがあるからです。感覚過敏とは視覚や聴覚など五感が敏感に反応してしまう症状で、触覚においても過敏に反応し、例えば、マスクを付けると、チクチク、ゾワゾワすると言った感じになり、長時間付けていると気分が悪くなるという場合もあるのです。それを知らない、理解出来ないと言う方々からは、「何故、マスクを付けないのだ!？」と強く叱責される場合もあるそうです。ですから、皆さんにお願いします。様々な特性のある方々が存在すると言うことを、まず知って下さい。そして理解して下さい。それが「ダイバーシティ」と言うことなのですから。

では最後のエピソードです。これはコロナとは関わりありませんが、「笑い」とは、やはり「脳の一つの働き」なんだなあ、と感じたお話です。それは失語症の患者の方々が、再び話が出来るようにリハビリを行う「言語聴覚士」に伺ったお話です。「失語症」、多分お聞きになったことはあろうかと。喩えると、以下のような症状になります。「リンゴは、何か分かる。絵には浮かぶ。だけど、リンゴと言う言葉にならない。皮を剥いて食べるものであることは分かる。しかし、それがリンゴだと言う言葉に結びつかない。だから、リンゴだと言えないし、リンゴだと聞いても、ああ、皮を剥いて食べるものね、とは、すぐには結びつかない」そう言った症状のことです。そして、この患者さんの苦しさは、次のポイントにあります。例えば貴方は入院中。恋人がお見舞いに来て「リンゴ、食べる？リンゴよ？皮を剥いて食べるもの。リンゴが分からないの？ああ、もう貴方は、何もかも分からなくなったのね」と、貴方の横で泣き崩れたとします。しかし貴方は、「それが皮を剥いて食べるもんやっちゃうのは、分かって

んねん。ただ、リングと言う言葉に結びつけへんねん。何もかも分からなくなった訳ちゃうねん」と、それこそ言葉に出来ず、心の中で呟くしか出来ないのです。これは辛い。では、何故、こうしたことが起こるのか？それは、人間の左の脳には言語中枢と呼ばれる箇所があって、そこが、何らかのキッカケで、例えば脳梗塞とか脳炎、脳腫瘍、くも膜下出血などで損傷を負ってしまうと、こうした失語症と言う障害が出る可能性があるのです。まさに、誰にでも起こりうる障害なのです。しかし、全ての言葉を失うわけではありません。言語聴覚士の先生は「結局ね、自分の中で一番大事なものが強固に残るんですよ。それまでの人生で利用頻度が高い言葉、自分と親密性が高いものが残るんですよ」と、ある患者さんのエピソードを教えてくださいました。「リハビリをしていた男性ですが、私の言っていること、理解出来ているのかな？聞こえているのかな？と言うような方だったんですが……、その方が、後ろでついたままになったテレビに、バツと反応したんです。そのテレビからは、ニッケイハイキンと聞こえたんです。そうです。その方は、日経平均、と言う言葉には反応されたんです。その方は、もともと証券マンだったんですよ」とのこと。何だか凄いですよね。

さて、この言語聴覚士の先生から、失語症と同じように脳の損傷で起こる症状に「感情失禁」と言うのもあると教えてもらいました。何とも衝撃的なネーミングです。この「感情失禁」とは、感情のコントロールがうまくできず、急に泣く、怒る、笑うなど感情の起伏が激しくなる状態のことを言うそうです。「急に泣く」「突然怒る」などは、病気の症状と言われても、そう言うこともあるだろうと思うのですが、「笑う」と言うのもその症状の一つと言われて驚いてしまいました。その先生によると、笑いにも色々あって「たいしたことでもないのに、めちゃくちゃ笑って周囲からひかれる」であるとか「常に、ニタついていて、いい加減真面目にしろ！」と叱られると言うようなケースもあるとのことでした。こうした笑いは「不健康な笑い」と言えるかもしれません。やはり「健康的な笑い」は「健康な心身」があってこそ、なんでしょう。

いずれにせよ、やはり「笑い」は不思議です。このコロナ禍において、ストレスの多い日々ではありますが、何か明るい面を見つけて一生懸命笑おうとする人がいる。そうかと思えば、病気の影響で、笑いたくもないのに笑わずにはいられない人もいます。そうなのです。様々な思いを持つ人、様々な価値観を持つ人、そして様々な障害や疾患のある人がいる。そうした様々な方々がおられることを知り、理解すること。それがダイバーシティなのです。

ですから、笑いも様々な笑いがあることは間違いないのですが、さて、どれほどの笑いの種類があるのでしょうか？そうした様々な笑いを、シッカリ分類・分析をして、そしていつの日か、それを体系立てて解説してみたいと言う決意を、去年同様ここに表明して、この拙文を締めることにいたします。最後まで、お読みいただき、本当にありがとうございました。

笑都大阪の笑いは健在か？現代人が「笑う」形式の研究

追手門学院大学生の「笑い」に関する意識調査

4年間（2016年度～19年度）の総括

上方文化笑学センター長、国際教養学部国際日本学科 高垣 伸博

はじめに

上方文化笑学センター（旧笑学研究所）が研究の一環として、「ユーモアを解したコミュニケーション能力のある人材育成のための教育プログラムの開発」に資することを目的として、2016年度に開始したこの調査も、今年度の分析分（2019年度調査分）で4年目になる。

昨年の報告でも記したが、分析・考察の参考にしたのが、青砥弘幸の研究である。彼は『現代の若者の「笑い」に関する実態とその課題』（日本笑い学会論文、笑い学研究第22号2015）の中で『学校教育における「ユーモア能力」育成の在り方を検討してゆくための基礎的な知見を得ることを目的として、大学生に対して実施した』と述べた上で、8つの観点からの意識調査を行っている。その8つの観点とは、①人間関係形成力としての笑い、②レジリエンスとしての笑い、③言語能力としての笑い、④伝統文化としての笑い、⑤笑いによる過剰な攻撃、⑥笑いに関する判断力の不足、⑦笑いによる呪縛、⑧笑いによる逃避、である。また、『学校教育の枠組みの中で「ユーモア能力」の意図的・系統的な育成の実現を目指していくためには、その「目標」が指定され、それに基づいた具体的かつ現実的な「方法」や「教材」が開発される必要がある。そして、そのようなカリキュラムの作成・実践のためには、さらに前提として2点について検討が必要となる。それは、第1に「生活の中で適切・効果的に〈笑い〉を活用できるとはどのような状態を指すのか」という問題であり、第2に「現代の子ども・若者は〈笑い〉に関してどのような意識や態度をもっているのか（実態・課題）」という問題である。』と指摘し、その2点目に焦点を当てて研究を行うと述べている。この青砥の調査は本研究に大いに参考になるものであり、特に興味深いのが前述の8つの観点の内の①人間関係形成力としての笑い、③言語能力としての笑い、④伝統文化としての笑い、である。

我々の調査はこの3つの観点（3つの笑い）を中心に、追手門学院大学生の「笑い」に関する意識を調査し、考察したものであることを今一度確認しておく。

【調査方法】

調査方法は無記名によるアンケート用紙記入方式である。全部で24の設問に対して、主として5段階（1～5）の中から選択回答するものと、解答例からの選択、そして自由記述の3種類の回答方法で4年間同様の設問で実施した。（最終頁アンケート用紙参照）

なお5段階選択方式の集計に関しては、4・5の回答をまとめて「当てはまる（積極派）」、1・2の回答をまとめて「当てはまらない（消極派）」として報告している。

なお、「現代の若者」の代表として本学学生を調査対象とし、2016年度は482人（男子238人・女子228人・不明16人）、2017年度は377人（男子216人・女子150人・不明11人）、2018年度は432人（男子253人・女子168人・不明11人）、2019年度が396人（男子214人・女子156人・不明26人）、総計1687人（男子921人・女子702

人・不明 64 人) から回答を得た。

1. 人間関係（環境）とコミュニケーション

社会生活を営むうえで、人間関係を見捨てることはできない。コミュニケーションは不可欠である。しかし、日本のような高コンテクスト社会は、「以心伝心」「阿吽の呼吸」と言われるように、「言わずもがな」つまり、喋らなくても理解される社会である。「目は口ほどにものを言う」という諺があるように、ノンバーバルコミュニケーションで意思の疎通ができる場合が多い。

とは言うものの、円滑な人間関係を築くために、また、自己の主張や人との調和を図るためには、言語表現、つまり「喋る」という行為を見捨てることはできない。特に、大学生の場合には、授業内でのプレゼンやグループワーク、また、クラスメートとの歓談やサークル活動においては、「喋る」ということは避けては通れない行為である。

そこで、自分と周囲の身近な人間関係におけるコミュニケーションについて聞いてみた。

「あなたはよく喋るタイプですか？」(表①-a) という問いである。「当てはまる」との回答は4か年ともに40%以上、平均で約45%が「よく喋るタイプ」だと自認している。

一方で「無口」に「当てはまる」と回答した学生は平均20%強となった。4年間で見てみると、2019年度が「よく喋る」と「無口」の割合の開きが大きい、いずれにせよ「無口」より「よく喋る」の方が多いということは好ましい結果である。

表①-a あなたはよく喋るタイプですか？

年次	無口	よく喋る					よく喋る
		1	2	3	4	5	
2016		1	2	3	4	5	
		19	105	134	152	72	
		3.90%	21.80%	27.80%	31.50%	14.90%	
2017		1	2	3	4	5	
		12	76	118	102	69	
		3.20%	20.20%	31.30%	27.10%	18.30%	
2018		1	2	3	4	5	
		13	80	162	103	71	
		3.03%	18.65%	37.76%	24.01%	16.55%	
2019		1	2	3	4	5	
		17	57	133	108	80	
		4.30%	14.43%	33.70%	27.34%	20.25%	
合計		1	2	3	4	5	
		61	318	547	465	292	
		3.62%	18.89%	32.50%	27.63%	17.35%	

よく喋る		無口	
2016	224人 (46.47%)	2016	124人 (25.73%)
2017	171人 (45.36%)	2017	88人 (23.34%)
2018	174人 (40.56%)	2018	93人 (21.73%)
2019	188人 (47.59%)	2019	74人 (18.73%)
合計	757人 (44.98%)	合計	379人 (22.52%)

では男女で違いはあるのだろうか。4か年平均で「よく喋る」は男性が41.22%、女性が49.72%という結果である。(表①-b)

一方「無口」は男性が女性より10%以上多いことがわかる。やはり女性の方が男性よりも「お喋り」だということである。

表①-b あなたはよく喋るタイプですか？男女別

無口	1	2	3	4	5	よく喋る
	27.48%			41.22%		
【男性】	50	202	287	229	149	
【女性】	9	102	242	220	129	
	15.81%			49.72%		

次に、喋る場合の相手によって、結果がどう変わるのかを家族と友人の場合で問うてみた。

まずは、「友人とはよく喋りますか？」という設問である。(表②-a)

表②-a 友人とはよく喋りますか？

2016	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		7	28	87	169	191	
		1.50%	5.80%	18.00%	35.10%	39.60%	
2017	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		9	17	80	122	149	
		2.40%	4.50%	21.20%	32.40%	39.50%	
2018	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		5	21	94	143	168	
		1.16%	4.87%	21.81%	33.18%	38.98%	
2019	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		5	11	72	130	178	
		1.26%	2.78%	18.18%	32.83%	44.95%	
合計	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		26	77	333	564	686	
		1.54%	4.57%	19.75%	33.45%	40.69%	

喋る		喋らない	
2016	360人 (74.69%)	2016	35人 (7.26%)
2017	271人 (71.88%)	2017	26人 (6.90%)
2018	311人 (72.16%)	2018	26人 (6.03%)
2019	308人 (77.78%)	2019	16人 (4.04%)
合計	1250人 (74.14%)	合計	103人 (6.11%)

4か年とも70%以上が「当てはまる」という結果であった。では、男女別では差があるのだろうか。(表②-b)

表②-b 友人とはよく喋りますか？男女別

喋らない	1	2	3	4	5	喋る
	7.49%			71.44%		
【男性】	21	48	194	293	365	
【女性】	4	25	131	241	300	
	4.14%			77.18%		

4年平均で、女子の方が少し男子を上回っているものの、男女共7割以上が「友人とはよく喋る」という結果である。一方、友人とは「喋らない」との回答は男女とも10%には届かない数字ではあるが、気になるところである。

では、友人より気心が知れている（はずである）家族との場合はどうだろうか。そこで、「家族とよく喋りますか？」と問うてみた。(表③-a)

表③-a 家族とよく喋りますか？

2016	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		23	56	118	149	136	
		4.80%	11.60%	24.50%	30.90%	28.20%	
2017	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		14	30	109	109	115	
		3.70%	8.00%	28.90%	28.90%	30.50%	
2018	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		13	37	113	132	137	
		3.01%	8.56%	26.16%	30.56%	31.71%	
2019	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		5	11	72	130	178	
		1.26%	2.785	18.18%	32.83%	44.95%	
合計	喋らない	1	2	3	4	5	喋る
		55	134	412	520	566	
		3.26%	7.94%	24.42%	30.20%	33.55%	

喋る		喋らない	
2016	285人 (59.13%)	2016	79人 (16.39%)
2017	224人 (59.42%)	2017	44人 (11.67%)
2018	269人 (62.27%)	2018	50人 (11.57%)
2019	308人 (77.78%)	2019	16人 (4.04%)
合計	1086人 (60.26%)	合計	189人 (11.20%)

4か年平均でおよそ60%の学生が「当てはまる」と回答した。これは意外な結果であった。筆者の思い込みなのだろうが、友人とよく喋るのは解るが、今どきの大学生は家族とはあまり喋らないのではないかと予想していたのだ。しかし、この予想に反したということは、好ましい結果であると言える。

ただ、この家族との関係性においては、家族の「誰」と喋るかが重要なポイントになるので、家族の対象を限定してゆけば、また違った面白い結果が得られるであろう。

それはさておき、この設問に関して男女に違いはあるのだろうか。(表③-b)

表③-b 家族とよく喋りますか？男女別

喋らない	1	2	3	4	5	喋る
	14.35%			54.78%		
【男性】	43	89	284	278	226	
【女性】	14	50	136	207	195	
	9.12%			57.26%		

「家族とよく喋る」は4か年平均では大差ないが、「喋らない」は女性のほうが少ない。つまり、よく喋らなくとも、わずかではあるが女性の方が男性よりも家族とは喋ると言えるであろう。

では次に、自分は「よく喋る」方だと回答している学生が「友人ともよく喋る」か、「家族ともよく喋る」か、それぞれの関係性を見つめることにする。

まずは、「よく喋るタイプ」と回答した学生のうちで「友人とよく喋る」に「当てはまる」、つまり「自分はよく喋り」しかも「友人ともよく喋る」学生の割合はどのくらいなのだろうか。(表④)

表④ あなたはよく喋るタイプですか？×友人とはよく喋りますか？

2016		喋らない					喋る	
	Q1/Q3	1	2	3	4	5		
無口	1	7	2	4	2	4		27
	2	0	18	40	38	9		5.60%
	3	0	5	38	57	34		
	4	0	2	4	66	80		216
よく喋る	5	0	1	1	6	64		44.80%

2017		喋らない					喋る		
	Q1/Q3	1	2	3	4	5			
無口	1	5	2	3	0	2		18	
	2	3	8	32	29	4		4.77%	
	3	1	4	39	46	28			
	4	0	2	6	39	55		162	
よく喋る	5	0	1	0	8	60		43.00%	
2018		喋らない					喋る		
	Q1/Q3	1	2	3	4	5			
無口	1	4	3	4	0	2		19	
	2	0	12	30	25	13		4.44%	
	3	0	6	51	66	38			
	4	1	0	0	43	50		164	
よく喋る	5	0	0	0	7	64		38.32%	
2019		喋らない					喋る		
	Q1/Q3	1	2	3	4	5			
無口	1	3	2	7	2	3		12	
	2	2	5	30	12	8		3.04%	
	3	0	4	27	72	30			
	4	0	0	5	40	63		180	
よく喋る	5	0	0	3	4	73		45.57%	
合計		喋らない					喋る		
	Q1/Q3	1	2	3	4	5			
無口	1	19	9	18	4	11		76	
	2	5	43	132	104	34		4.56%	
	3	1	19	155	235	130			
	4	1	4	15	188	248		722	
よく喋る	5	0	2	4	25	261		43.31%	

結果は2016年が44.80%、2017年が43.00%、2018年が38.32%、2019年が45.57%、4か年平均は43.31%である。つまり、「自分はよく喋る」「友人とよく喋る」と答えた内の4割強が「自分はよく喋り、しかも、友人とよく喋る」ということである。

では、「自分はよく喋り」しかも「家族ともよく喋る」のはどうだろうか。(表⑤)

表⑤ あなたはよく喋るタイプですか？×家族とよく喋りますか？

2016		喋らない					喋る		
	Q1/Q4	1	2	3	4	5			
無口	1	8	4	4	0	3		35	
	2	4	19	30	41	11		7.26%	
	3	4	12	48	44	26			
	4	3	18	26	48	57		160	
よく喋る	5	4	3	10	16	39		33.20%	

2017		喋らない			喋る			
	Q1/Q4	1	2	3	4	5		
無口	1	5	1	4	1	1	21	
	2	5	10	28	21	12	5.57%	
	3	2	8	48	33	27		
	4	1	5	19	42	35	129	
よく喋る	5	1	6	10	12	40	34.20%	
2018		喋らない			喋る			
	Q1/Q4	1	2	3	4	5		
無口	1	3	3	4	0	3	12	
	2	5	12	25	27	11	2.80%	
	3	2	12	58	52	38		
	4		4	19	43	37	138	
よく喋る	5	3	4	6	10	48	32.20%	
2019		喋らない			喋る			
	Q1/Q4	1	2	3	4	5		
無口	1	4	3	7	0	3	12	
	2	1	4	30	13	9	3.05%	
	3	0	11	36	53	33		
	4	2	2	13	39	52	160	
よく喋る	5	1	3	6	12	57	40.61%	
合計		喋らない			喋る			
	Q1/Q4	1	2	3	4	5		
無口	1	20	11	19	1	10	80	
	2	15	34	113	102	43	4.79%	
	3	8	43	190	182	124		
	4	6	29	77	172	181	587	
よく喋る	5	9	16	32	50	184	35.13%	

約35%が「自分はよく喋り、家族ともよく喋る」という結果である。特に2019年は40%を超えている。

因みに、「友人ともよく喋る」、「家族ともよく喋る」と回答した学生のうち、「友人とも家族ともよく喋る」という学生は、4か年平均54.42%という結果になった。(表⑥)

表⑥ 友人とはよく喋りますか？×家族とよく喋りますか？

2016		喋らない			よく喋る			
	Q3/Q4	1	2	3	4	5		
喋らない	1	6	1	0	0	0	15	
	2	0	8	9	9	2	3.11%	
	3	1	16	47	16	7		
	4	9	17	34	82	27	251	
よく喋る	5	7	14	28	42	100	52.07%	

2017		喋らない					よく喋る		
	Q3/Q4	1	2	3	4	5			
喋らない	1	4	0	2	1	2		9	
	2	2	3	5	6	1		2.39%	
	3	1	5	49	18	7			
	4	4	14	35	44	25		189	
よく喋る	5	3	8	18	40	80		50.13%	

2018		喋らない					よく喋る		
	Q3/Q4	1	2	3	4	5			
喋らない	1	3	0	0	0	2		10	
	2	4	3	10	1	3		2.32%	
	3	3	13	48	19	11			
	4	1	10	41	65	26		233	
よく喋る	5	2	11	13	47	95		54.06%	

2019		喋らない					喋る		
	Q3/Q4	1	2	3	4	5			
喋らない	1	3	0	2	0	0		8	
	2	0	5	2	1	3		2.03%	
	3	2	4	43	16	7			
	4	1	7	33	59	30		244	
喋る	5	2	7	13	41	114		61.77%	

合計		喋らない					よく喋る		
	Q3/Q4	1	2	3	4	5			
喋らない	1	16	1	4	1	4		42	
	2	6	19	26	17	9		2.49%	
	3	7	38	187	69	32			
	4	15	48	143	250	108		917	
よく喋る	5	14	40	72	170	389		54.42%	

さて、言うまでもないが、人間の成長には家庭環境というものが大きく影響している。性格的な影響もあれば、言語的なものもあるだろう。家庭を楽しい場だと認識しているか否かも成長過程では重要であろう。楽しいと思わない家庭より、楽しい家庭の方が会話も多く、弾むであろうことは容易に想像できる。

そこで、「楽しい家庭ですか？」という問いかけをした。(表⑦)

表⑦ 楽しい家庭ですか？

2016	思わない	1	2	3	4	5	楽しい家庭
		23	53	110	170	126	
		4.80%	11.00%	22.80%	35.30%	26.10%	

2017	思わない	1	2	3	4	5	楽しい家庭
		15	31	91	127	113	
		4.00%	8.20%	24.10%	33.70%	30.00%	
2018	思わない	1	2	3	4	5	楽しい家庭
		16	23	111	137	145	
		3.70%	5.32%	25.69%	31.71%	33.56%	
2019	思わない	1	2	3	4	5	楽しい家庭
		10	14	72	149	149	
		2.54%	3.55%	18.27%	37.82%	37.82%	
合計	思わない	1	2	3	4	5	楽しい家庭
		64	121	384	583	533	
		3.80%	7.18%	22.79%	34.60%	31.63%	

楽しい家庭		思わない	
2016	296人 (61.41%)	2016	76人 (15.77%)
2017	240人 (63.66%)	2017	46人 (12.20%)
2018	282人 (65.28%)	2018	39人 (9.03%)
2019	298人 (75.63%)	2019	24人 (6.10%)
合計	1116人 (66.23%)	合計	185人 (10.98%)

「当てはまる」と回答した学生が2016年は61.41%、2017年は63.66%、2018年は65.28%、2019年は75.63%と4か年平均で66.23%という結果になった。この数字は「家族とよく喋りますか」より高い数字である。また、どちらも60%台である。つまり、家庭が楽しければ家族とよく喋る、ということである。

2019年度の数字が他の年より高い。その理由は解らないが、2019年度の数字に関しては、このあとも意識をして見ていただきたい。

ともあれ、家庭環境がコミュニケーション力を育むことに大きく影響を与えるであろうことは明らかである。

では「よく喋るタイプ」に「当てはまる」と回答した学生のうち、どれくらいの学生が「とても楽しい家庭」に「当てはまる」のだろうか。(表⑧)

表⑧ あなたはよく喋るタイプですか？×楽しい家庭ですか？

2016		思わない				楽しい家庭	
	Q1/Q5	1	2	3	4	5	
無口	1	8	2	3	3	3	32
	2	3	19	27	39	17	6.64%
	3		12	50	49	23	
よく喋る	4	8	13	22	65	44	162
	5	4	7	8	14	39	33.60%

2017		思わない					楽しい家庭	
	Q1/Q5	1	2	3	4	5		
無口	1	5	1	1	3	2	26	
	2	4	16	20	20	16	6.90%	
	3	3	5	38	41	31		
よく喋る	4	1	6	25	42	28	127	
	5	2	3	7	21	36	33.70%	

2018		思わない					楽しい家庭	
	Q1/Q5	1	2	3	4	5		
無口	1	3	2	1	3	4	18	
	2	6	7	23	25	19	4.20%	
	3	4	7	55	57	39		
よく喋る	4	1	4	19	37	42	135	
	5	2	2	11	15	41	31.47%	

2019		思わない					楽しい家庭	
	Q1/Q5	1	2	3	4	5		
無口	1	3	0	5	3	5	11	
	2	3	5	14	23	11	2.80%	
	3	1	3	32	64	33		
よく喋る	4	0	2	16	43	47	159	
	5	3	4	4	16	53	40.46%	

合計		思わない					楽しい家庭	
	Q1/Q5	1	2	3	4	5		
無口	1	19	5	10	12	14	87	
	2	16	47	84	107	63	5.16%	
	3	8	27	175	211	132		
よく喋る	4	10	25	82	187	161	583	
	5	11	16	30	66	169	34.56%	

4か年平均で約35%の学生が「当てはまる」、つまり「自分はよく喋り」「とても楽しい家庭だ」と認識しているということである。

では「家族とよくしゃべり」「楽しい家庭」に「当てはまる」と答えた学生はどのくらいいるのだろうか。(表⑨)

表⑨ 家族とよく喋りますか？×楽しい家庭ですか？

2016		思わない					楽しい家庭	
	Q4/Q5	1	2	3	4	5		
喋らない	1	9	12	1	1	0	45	
	2	9	15	20	10	2	9.34%	
	3	2	19	61	30	6		
喋る	4	3	6	20	93	27	247	
	5	0	1	8	36	91	51.24%	

2017		思わない					楽しい家庭	
Q4/Q5		1	2	3	4	5		
喋らない	1	10	2	1	0	1	29	
	2	2	15	10	3	0	7.69%	
	3	0	9	61	31	8		
喋る	4	2	4	17	67	19	197	
	5	1	1	2	26	85	49.60%	
2018		思わない					楽しい家庭	
Q4/Q5		1	2	3	4	5		
喋らない	1	8	2	1	2	0	24	
	2	3	11	13	9	1	5.56%	
	3	4	7	64	25	13		
喋る	4	1	2	30	72	27	232	
	5	0	1	3	29	104	53.70%	
2019		思わない					楽しい家庭	
Q4/Q5		1	2	3	4	5		
喋らない	1	4	1	2	1	0	11	
	2	1	5	9	5	2	2.80%	
	3	3	4	45	35	6		
喋る	4	1	4	10	78	23	248	
	5	1	0	6	30	117	63.10%	
合計		思わない					楽しい家庭	
Q4/Q5		1	2	3	4	5		
喋らない	1	31	17	5	4	1	109	
	2	15	46	52	27	5	6.59%	
	3	9	39	231	91	33		
喋る	4	7	16	77	310	96	924	
	5	2	3	19	121	397	55.86%	

4か年平均で55.86%の学生が「家族とよくしゃべり」「楽しい家庭」に「当てはまる」と答えた。わずか4年の数字ではあるが、この結果から「家族とよく喋り、楽しい家庭に育つとよく喋るようになる」と言うことができるであろう。また、追大生の6割弱がそのような学生であるということは、喜ばしい結果ではないだろうか。

ここまでは「喋る」という行為に対する学生の意識を中心にした設問であったが、そもそもこの調査は「若者の笑いに対する意識」を明らかにすることである。

ここで言う「喋る」行為とは1対1の対話、日常生活、とりわけ授業におけるグループ内での発言やプレゼンテーション、はたまた、大勢の前でのスピーチをも含めて「喋る」行為と捉え、これらの能力に長けていることを「コミュニケーション能力がある」という理解を共有しておきたい。

さて、追大生の約45%が「よく喋るタイプ」という結果であるが、果たして「あなたは大勢の前で喋るのが得意ですか？」との問いに対してはどのようなだろうか。(表⑩-a)

表⑩-a あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？

2016	苦手	1	2	3	4	5	得意
		144	129	118	66	25	
		29.90%	26.80%	24.50%	13.70%	5.20%	
2017	苦手	1	2	3	4	5	得意
		110	103	96	48	20	
		29.20%	27.30%	25.50%	12.70%	5.30%	
2018	苦手	1	2	3	4	5	得意
		131	109	120	52	20	
		30.32%	25.23%	27.78%	12.04%	4.63%	
2019	苦手	1	2	3	4	5	得意
		107	87	110	52	39	
		27.09%	22.03%	27.85%	13.16%	9.87%	
合計	苦手	1	2	3	4	5	得意
		492	428	444	218	104	
		29.18%	25.39%	26.33%	12.93%	6.17%	

得意		苦手	
2016	91人 (18.88%)	2016	273人 (56.64%)
2017	68人 (18.04%)	2017	213人 (56.50%)
2018	72人 (16.67%)	2018	240人 (55.56%)
2019	91人 (23.04%)	2019	194人 (49.11%)
合計	322人 (19.10%)	合計	920人 (54.57%)

「当てはまる」が2016年は18.88%、2017年は18.04%、2018年が16.67%、2019年が23.04%という結果である。4か年平均で約19%の学生しか大勢の前で喋る自信を持っていないのである。

約45%の学生が「よく喋る」と回答しながら、大勢の前で喋るとなると、自信のある学生は半分以下になってしまった。一方で約55%の学生が「人前で喋るのは苦手」という結果になった。これは忌々しき問題ではないだろうか。

では、男女差はあるのだろうか。(表⑩-b)

表⑩-b あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？男女別

苦手	1	2	3	4	5	得意
	49.84%			21.01%		
【男性】	226	233	268	128	66	
【女性】	252	179	158	80	31	
	61.48%			15.83%		

男性のほうが女性より「得意」と答えた割合が高く、当然ながら「苦手」と答えた割合は女性のほうが男性より高い結果となった。つまり、女性のほうが人前に出ると控えめで、恥ずかしがりやということだ。

追大生のこのような危機的？状況の中でも、「よく喋るタイプ」であり、しかも「大勢の前で喋るのが得意だ」と言う頼もしい学生は存在するはずである。そこで、「よく喋るタイプ」と「大勢の前で喋るのが得意」との関係を見とみることにする。(表⑩)

表⑩ あなたはよく喋るタイプですか？×あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？

2016		苦手					得意		
	Q1/Q2	1	2	3	4	5			
無口	1	18	1	0	0	0		107	
	2	62	26	15	2	0		22.20%	
	3	35	52	38	7	2			
よく喋る	4	19	45	46	40	2		80	
	5	10	5	19	17	21		16.60%	
2017		苦手					得意		
	Q1/Q2	1	2	3	4	5			
無口	1	9	1	1	0	1		76	
	2	45	21	9	0	1		20.20%	
	3	32	45	32	7	2			
よく喋る	4	16	28	37	18	3		57	
	5	8	8	17	23	13		15.10%	
2018		苦手					得意		
	Q1/Q2	1	2	3	4	5			
無口	1	9	4	0	0	0		82	
	2	42	27	7	3	1		19.10%	
	3	61	40	51	9	1			
よく喋る	4	13	28	44	18	0		57	
	5	6	10	16	21	18		13.30%	
2019		苦手					得意		
	Q1/Q2	1	2	3	4	5			
無口	1	11	2	2	0	2		62	
	2	30	19	5	2	1		15.74%	
	3	44	36	45	7	1			
よく喋る	4	16	25	37	25	5		78	
	5	5	5	21	18	30		19.80%	
合計		苦手					得意		
	Q1/Q2	1	2	3	4	5			
無口	1	47	8	3	0	3		327	
	2	179	93	36	7	3		19.44%	
	3	172	173	166	30	6			
よく喋る	4	64	126	164	101	10		272	
	5	29	28	73	79	82		16.17%	

4か年平均で16.17%は存在するということが判った。経年で数字を見ると2016年16.6%、2017年15.1%、2018年13.3%と減少しているが、2019年は19.8%となっており、これまでの結果を見ても、2019年度は他年度と比べると、総じて積極方向の数字が高い傾向がある。しかし、アンケートのサンプル数が少ないことや対象学生の所属学部など、対象者の属性に統一性があるわけではないので、この傾向に対する根拠は明らかにはできないが、毎年対象者に1年生の占める割合が多いので、2019年度入学生は積極的な傾向がある可能性がある、という程度にとどめ

ておきたい。

さて、「大勢の前で喋るのが得意だ」とは意味合いが異なるかもしれないが、コミュニケーションを図り人間関係を築く上で、同様に重要な要素であり、「積極性」を下支えするのは「目立ちたがり」と言う資質ではないだろうか。勿論、それがマイナスに影響する場合もあることは断っておく。

「あなたは目立ちたがり屋ですか？」との設問の結果はどうだろうか。(表⑫-a)

表⑫-a あなたは目立ちたがり屋ですか？

年	控え目	1	2	3	4	5	目立ちたがり
2016							
		104	148	148	61	21	
		21.60%	30.70%	30.70%	12.70%	4.40%	
2017							
		71	109	129	48	20	
		18.80%	28.90%	34.20%	12.70%	5.30%	
2018							
		89	136	128	59	20	
		20.60%	31.48%	29.63%	13.66%	4.63%	
2019							
		87	124	127	36	22	
		21.97%	31.31%	32.07%	9.09%	5.56%	
合計							
		351	517	482	204	83	
		21.44%	31.58%	29.44%	12.46%	5.07%	

目立ちたがり	控え目
2016 82人 (17.01%)	2016 252人 (52.28%)
2017 68人 (18.04%)	2017 180人 (47.75%)
2018 79人 (18.29%)	2018 225人 (52.08%)
2019 58人 (14.65%)	2019 211人 (53.28%)
合計 287人 (17.53%)	合計 868人 (53.02%)

4か年平均で17.53%の学生が「目立ちたがり」と答えており、「控え目」と答えた50%強と比べるとかなり低い数字である。この17.53%という数字は、「大勢の前で喋るのが得意」と答えた19.1%と比較的に近い数字であり、「目立ちたがり」と「大勢の前で喋るのが得意」には相関関係があるということを裏付けている。

では、この「目立ちたがり屋」には男女差があるのだろうか。(表⑫-b)

表⑫-b あなたは目立ちたがり屋ですか？ 男女別

控え目	1	2	3	4	5	目立ちたがり
	49.08%			19.65%		
【男性】	186	266	288	129	52	
【女性】	180	232	227	67	26	
	56.28%			12.70%		

4か年平均の結果を見てみると、「目立ちたがり」は女性のほうが約7%低く、当然反比例して「控え目」のほうは女性の方が約7%高いことがわかる。

ニュースキャスターやアナウンサーはもとより、笑芸界への女性進出が珍しいことではなくなっている昨今ではあるが、この結果をみると「目立ちたがり」では、まだ男性が一步先を進んでいると言える。

さて約6割が「家族とよく喋る」追大生ではあるが、「よく喋る楽しい家庭」における「笑い」に関してはどうか、確認してゆくことにする。

「家族を笑わせますか？」との設問への回答はどうだろうか。(表⑬)

表⑬ 家族を笑わせますか？

2016	笑わせない	1	2	3	4	5	笑わせる
		42	85	127	152	76	
		8.70%	17.60%	26.30%	31.50%	15.80%	
2017	笑わせない	1	2	3	4	5	笑わせる
		24	61	126	103	63	
		6.40%	16.20%	33.40%	27.30%	16.70%	
2018	笑わせない	1	2	3	4	5	笑わせる
		23	67	151	128	61	
		5.35%	15.58%	35.12%	29.77%	14.19%	
2019	笑わせない	1	2	3	4	5	笑わせる
		21	47	99	143	85	
		5.32%	11.90%	25.06%	36.20%	21.52%	
合計	笑わせない	1	2	3	4	5	笑わせる
		110	260	503	526	285	
		6.53%	15.44%	29.87%	31.24%	16.92%	

笑わせる		笑わせない	
2016	228人 (47.32%)	2016	127人 (26.35%)
2017	166人 (44.03%)	2017	85人 (22.55%)
2018	189人 (43.95%)	2018	90人 (20.93%)
2019	228人 (57.72%)	2019	68人 (17.22%)
合計	811人 (48.16%)	合計	370人 (21.97%)

「当てはまる」と答えたのは4か年平均で48.16%である。前述（表⑦）の「楽しい家庭」と回答した66.23%と比べると約18%少ないことになる。

必ずしも「家庭が楽しい」からと言って、「家族を笑わせる」ことには繋がらないということだ。しかし、「家庭が楽しい」ことと「笑い」は正比例するのではないかと推測する。

では、「家族を笑わせる」と回答したのはどんなタイプの学生なのか。それを少しでも明らかにするために以下の分析を行った。

まず、「よく喋るタイプですか?」と「家族を笑わせますか?」の関係、つまり、「よく喋り、しかも、家族を笑わせる」学生はどのくらいいるのだろうか。（表⑭）

表⑭ あなたはよく喋るタイプですか?×家族を笑わせますか?

2016		笑わせない					笑わせる	
	Q1/Q6	1	2	3	4	5		
無口	1	11	1	3	2	2		55
	2	10	33	30	27	5		11.40%
	3	5	26	60	30	13		
	4	9	18	27	73	25		149
	5	7	7	7	20	31		30.90%
2017		笑わせない					笑わせる	
	Q1/Q6	1	2	3	4	5		
無口	1	4	3	3		2		39
	2	10	22	24	13	7		10.34%
	3	4	20	53	32	9		
	4	1	12	34	34	21		103
よく喋る	5	5	4	12	24	24		27.30%
2018		笑わせない					笑わせる	
	Q1/Q6	1	2	3	4	5		
無口	1	4	4	3	1	1		36
	2	8	20	31	16	4		8.43%
	3	7	23	71	49	12		
	4	2	12	30	45	13		106
よく喋る	5	2	6	15	17	31		24.82%
2019		笑わせない					笑わせる	
	Q1/Q6	1	2	3	4	5		
無口	1	4	4	4	2	2		27
	2	5	14	21	14	3		6.85%
	3	6	16	41	54	16		
	4	2	10	19	52	25		137
よく喋る	5	4	3	13	21	39		34.77%
合計		笑わせない					笑わせる	
	Q1/Q6	1	2	3	4	5		
無口	1	23	12	13	5	7		157
	2	33	89	106	70	19		9.45%
	3	22	85	225	165	50		
	4	14	52	110	204	84		495
	よく喋る	5	18	20	29	82	125	

2016年が30.90%、2017年は27.30%、2018年は24.82%、そして2019年は34.77%と、ここでも2019年度は他年度と比べると高い結果が出ている。4か年平均29.78%、約3割の学生が「よく喋り、しかも、家族を笑わせる」という結果である。

次に「家族とよく喋る」と「家族を笑わせる」の関係を見てみることにする。つまり「家族とよく喋り、家族を笑わせる」学生はどのくらいいるのか。(表⑮)

表⑮ 家族とよく喋りますか？×家族を笑わせますか？

2016		笑わせない					笑わせる					
Q4/Q6		1	2	3	4	5						
喋らない	1	15	6	1	1	0						60
	2	16	23	7	8	2						12.45%
	3	8	33	55	17	5						
	4	1	22	48	66	12						195
	5	2	1	16	60	57						40.46%
2017		笑わせない					笑わせる					
Q4/Q6		1	2	3	4	5						
喋らない	1	10	1	1	1	1						32
	2	7	14	7	2	0						8.49%
	3	4	32	58	13	2						
	4	0	9	41	51	8						147
	5	3	5	19	36	52						38.99%
2018		笑わせない					笑わせる					
Q4/Q6		1	2	3	4	5						
喋らない	1	10	2	1	0	0						40
	2	6	22	4	5	0						9.30%
	3	4	28	64	11	4						
	4	2	10	59	56	5						169
	5	1	5	23	56	52						39.30%
2019		笑わせない					笑わせる					
Q4/Q6		1	2	3	4	5						
喋らない	1	7	1	0	0	0						19
	2	5	6	8	2	1						4.82%
	3	5	27	41	18	2						
	4	3	9	31	65	9						204
	5	1	4	19	58	72						51.78%
合計		笑わせない					笑わせる					
Q4/Q6		1	2	3	4	5						
喋らない	1	42	9	3	2	1						144
	2	34	59	26	17	3						8.80%
	3	21	93	218	59	13						
	4	6	41	179	238	34						715
	5	7	11	77	210	233						43.70%

2016年は40.46%、2017年は微減の38.99%、2018年は39.3%、2019年は51.78%と、ここでも2019年度は高い数字が出ている。平均で43.7%の学生が「家族とよく喋り、家族を笑わしている」という結果であった。

では「楽しい家庭」と「家族を笑わせる」関係となるとどうだろうか。(表⑩)

表⑩ 楽しい家庭ですか？×家族を笑わせますか？

2016		笑わせない					笑わせる		
	Q5/Q6	1	2	3	4	5			
思わない	1	16	6	0	1	0		58	
	2	14	22	11	6	0		12.24%	
	3	6	34	51	14	5			
	4	4	19	47	86	14		202	
楽しい家庭	5	2	4	18	45	57		41.91%	
2017		笑わせない					笑わせる		
	Q5/Q6	1	2	3	4	5			
思わない	1	9	3	1	1	1		35	
	2	7	16	7	0	1		9.28%	
	3	6	19	54	11	1			
	4	2	17	39	56	13		151	
楽しい家庭	5		6	25	35	47		40.05%	
2018		笑わせない					笑わせる		
	Q5/Q6	1	2	3	4	5			
思わない	1	12	2	1	0	0		29	
	2	4	11	4	4	0		6.74%	
	3	4	34	63	8	2			
	4	2	12	50	70	3		175	
楽しい家庭	5	1	8	33	46	56		40.70%	
2019		笑わせない					笑わせる		
	Q5/Q6	1	2	3	4	5			
思わない	1	6	3	1	0	0		18	
	2	3	6	3	2	0		4.57%	
	3	8	18	34	11	1			
	4	3	12	47	76	11		213	
楽しい家庭	5	1	8	14	53	73		54.06%	
合計		笑わせない					笑わせる		
	Q5/Q6	1	2	3	4	5			
思わない	1	43	14	3	2	1		140	
	2	28	55	25	12	1		8.42%	
	3	24	85	202	44	9			
	4	11	60	183	288	41		741	
楽しい家庭	5	4	26	90	179	233		44.56%	

2016年は41.91%、2017年は40.05%、2018年は40.7%、2019年は54.06%、平均44.56%の学生が「楽しい家庭で、家族を笑わせる」ということである。彼ら彼女らは楽しい円満な家庭環境にあり、「楽しい家庭」環境が「よく喋り」「笑わせる」ことに強く影響を与えているということである。

また、ここまでの結果で2019年度の結果が4か年の平均値を持ち上げていることも明らかになった。

2. 良好な人間関係を育む「笑い」

2-1 能動的な「笑い」

能動的な「笑い」とは、「おかしさ（ユーモア）」発信の結果、人に「笑い」をおこさせる行為、つまり、笑わせるという行為である。ここでは、その「笑わせる」ことを主として考察してゆくことにする。

前項では「家族」を相手に「笑わせる」のかどうかを見たが、ここでは笑わせる対象を「家族」に限定せずに、対象を広げて「人を笑わせるのが得意ですか？」と問いかけた。（表⑰-a）

表⑰-a 人を笑わせるのは得意ですか？

年	苦手	1	2	3	4	5	得意
		77	125	195	61	24	
		16.00%	25.90%	40.50%	12.70%	5.00%	
2017	苦手	1	2	3	4	5	得意
		38	103	160	49	27	
		10.10%	27.30%	42.40%	13.00%	7.20%	
2018	苦手	1	2	3	4	5	得意
		45	141	169	50	27	
		10.42%	32.64%	39.12%	11.57%	6.25%	
2019	苦手	1	2	3	4	5	得意
		57	100	157	53	29	
		14.39%	25.25%	39.65%	13.38%	7.32%	
合計	苦手	1	2	3	4	5	得意
		217	469	681	213	107	
		12.86%	27.80%	40.37%	12.53%	6.34%	

得意		苦手	
2016	85人 (17.63%)	2016	202人 (41.91%)
2017	76人 (20.16%)	2017	141人 (37.40%)
2018	77人 (17.82%)	2018	186人 (43.06%)
2019	82人 (20.71%)	2019	157人 (39.65%)
合計	320人 (18.97%)	合計	686人 (40.66%)

2016年では「当てはまる」が17.63%、2017年は20.16%、2018年は17.82%、2019年は20.71%、4か年で平均18.97%となった。対して、「当てはまらない」が平均40.66%と、その差は大きいことが判った。

この設問に関しては「笑わせる」という能動的な行為に対して、本当に「ウケている」のか否かは定かではない。回答者自身が日ごろから「受けている」、つまり「笑わせている」という認識に基づいて「笑わせるのが得意」と回答しているのだと判断せざるを得ない。回答者の勘違いを差し引くと、さらに数字は低くなるだろう。ともあれ、ウケていると認識することは自信となり、円滑なコミュニケーション構築に繋がるのではないだろうか。

では、この設問での回答に男女差はあるのだろうか。（表⑰-b）

表⑦-b 人を笑わせるのは得意ですか？男女別

苦手	1	2	3	4	5	得意
	39.63%			20.09%		
【男性】	120	245	371	122	63	
【女性】	90	204	288	82	38	
	41.88%			18.52%		

4か年平均で「得意」は男性の方が約1.5%高い程度で、「苦手」は女性が約2%高い。これは誤差のうちと考えてもよいだろう。昨年報告した3か年の平均では「得意」は男性が女性より約4%高い結果が出ていたが、4か年平均では、その差が縮まったということは2019年度の女性が数字を持ち上げていると考えられる。

では、「よく喋る」ことと「人を笑わせる」ことの関係はどうであろうか。「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」ではないが、撃たなければ当たらない。つまり確率の問題であると考え。「数多く喋らなければ」「笑わせられない」はずである。勿論、笑わせるための要因（おもしろさ）が重要であることは言うまでもない。

果たして、その「よく喋りかつ人を笑わせるのが得意」と自認する学生はどのくらい存在するのか。（表⑧）

表⑧ あなたはよく喋るタイプですか？×人を笑わせるのは得意ですか？

2016		苦手					得意		
	Q1/Q12	1	2	3	4	5			
無口	1	13	1	3	2	0		90	
	2	39	37	24	4	1		18.67%	
	3	14	43	69	7	1			
	4	8	37	75	26	6		70	
	5	3	7	24	22	16		14.52%	
よく喋る	1	6	3	2	0	1		60	
	2	20	31	22	1	2		15.92%	
	3	7	40	60	9	2			
	4	4	17	54	21	6		61	
	5	1	12	22	18	16		16.18%	
2017		苦手					得意		
	Q1/Q12	1	2	3	4	5			
無口	1	7	5	1	0	0		72	
	2	20	40	17	1	2		16.78%	
	3	12	58	77	14	1			
	4	4	30	49	16	4		59	
	5	2	7	23	19	20		13.75%	
よく喋る	1	6	3	2	0	1		60	
	2	20	31	22	1	2		15.92%	
	3	7	40	60	9	2			
	4	4	17	54	21	6		61	
	5	1	12	22	18	16		16.18%	
2018		苦手					得意		
	Q1/Q12	1	2	3	4	5			
無口	1	7	5	1	0	0		72	
	2	20	40	17	1	2		16.78%	
	3	12	58	77	14	1			
	4	4	30	49	16	4		59	
	5	2	7	23	19	20		13.75%	
よく喋る	1	6	3	2	0	1		60	
	2	20	31	22	1	2		15.92%	
	3	7	40	60	9	2			
	4	4	17	54	21	6		61	
	5	1	12	22	18	16		16.18%	

2019	苦手					得意			
	Q1/Q12	1	2	3	4	5			
無口	1	10	4	2	0	1		52	
	2	15	23	15	2	2		13.16%	
	3	22	46	55	8	2			
よく喋る	4	4	19	58	23	4		67	
	5	6	8	26	20	20		16.96%	
合計		苦手					得意		
	Q1/Q12	1	2	3	4	5			
無口	1	36	13	8	2	2		274	
	2	94	131	78	8	7		16.28%	
	3	55	187	261	38	6			
よく喋る	4	20	103	236	86	20		257	
	5	12	34	95	79	72		15.27%	

2016年は14.52%、2017年は微増の16.18%、2018年は13.75%、2019年は16.96%、4か年平均で15.27%という結果である。

確率の問題と前述したが、「よく喋る」ことは「笑わせる」ための必要最低条件ではある。一方で、言葉数が少なくても「笑わせるのが得意」、つまり天才的な笑わせ屋も存在するであろう。しかし、それは例外であり、やはり、日ごろからよく喋ることが必要不可欠であろう。

因みに「人を笑わせるのが得意」と回答した学生（3と回答した学生も含む）に、「あなたは漫才で言うとどちらのタイプ（ボケ&ツッコミ）ですか？」と質問してみると、興味深い結果になった。（表⑩-a）

表⑩-a あなたは漫才で言うとどちらのタイプですか？

2016	ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
		43	64	137	58	35	
		12.80%	19.00%	40.70%	17.20%	10.40%	
2017	ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
		29	52	102	60	34	
		10.50%	18.80%	36.80%	21.70%	12.30%	
2018	ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
		31	61	116	61	35	
		10.20%	20.07%	38.16%	20.07%	11.51%	
2019	ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
		32	55	107	59	41	
		10.88%	18.71%	36.39%	20.07%	13.95%	
合計	ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
		135	232	462	238	225	
		10.45%	17.96%	35.76%	18.42%	17.41%	

ボケ		ツッコミ	
2016	93人 (27.60%)	2016	107人 (31.75%)
2017	94人 (33.93%)	2017	81人 (29.24%)
2018	96人 (31.58%)	2018	92人 (30.26%)
2019	100人 (34.01%)	2019	87人 (29.59%)
合計	383人 (29.64%)	合計	367人 (28.41%)

4 年平均で「ボケ」が29.64%に対して「ツッコミ」が28.41%、人数比で383 人対367 人とほぼ同数であった。昨年度の3 年分の報告の際にも記したことであるが、これは追大生の特徴なのかどうか気になる場所である。調査を重ねるほどに数字は近づくのではないだろうか。また、何の根拠もないが、追大生に限らずとも、同様の結果になるのではないかと考える。ただし、これは「笑いの文化」を享受し、日常にまで引き降ろし、日常会話においてボケに対して自然にツッコムという習性を築き上げた、大阪を中心とした関西人に限られ、日ごろ笑いを中心として生活することを好む関西人のコミュニケーションスタイルであり、平和な共存のための自然な人間バランスなのではないだろうか。

では、このボケ・ツッコミバランスに男女差はあるのだろうか。(表⑩-b)

表⑩-b あなたは漫才で言うところのどちらのタイプですか？

ツッコミ	1	2	3	4	5	ボケ
	30.88%			32.06%		
【男性】	89	121	252	132	86	
【女性】	39	106	190	46	54	
	33.33%			22.99%		

男性のツッコミ210 人に対してボケが218 人、女性のツッコミ145 人に対してボケ100 人と、女性の方がツッコミとボケの差が大きいが、昨年報告した3 年平均では女性の「ボケ」と「ツッコミ」はどちらも113 人であった。

さて、前述したように「笑わせる」ためには、そのための要因（おもしろさ）が重要である。それは一般的に「冗談」と称される場合が多い。「ジョーク」と言ったり、古くは「冗句」と当て字で表現されたこともある。

コミュニケーションにおいて、人の発信した「冗談」を理解できることは重要である。更に重要なことは、「冗談」を発信できるかどうかである。

低コンテクスト社会である多民族国家では、初対面の相手にでも定番のジョークを駆使して、親近感を作り出そうとするが、日本の場合は冗談の言い合える関係が築けていることが前提となる。であるならば、関係が築けているはずの家族や仲間に冗談が言えないことはないはずである。

では、「あなたはよく冗談を言うタイプですか？」との設問に対する結果はどうであろうか。(表⑩)

表⑩ あなたはよく冗談を言うタイプですか？

2016	言わない	1	2	3	4	5	よく言う
		19	62	136	162	102	
		4.00%	12.90%	28.30%	33.70%	21.20%	

2017	言わない	1	2	3	4	5	よく言う
		10	46	118	123	79	
		2.70%	12.20%	31.40%	32.70%	21.00%	
2018	言わない	1	2	3	4	5	よく言う
		17	65	133	139	74	
		3.97%	15.19%	31.07%	32.48%	17.29%	
2019	言わない	1	2	3	4	5	よく言う
		16	48	103	132	97	
		4.04%	12.12%	26.01%	33.33%	24.49%	
合計	言わない	1	2	3	4	5	よく言う
		62	221	490	556	352	
		3.69%	13.15%	29.15%	33.08%	20.94%	

よく言う		言わない	
2016	264人 (54.89%)	2016	81人 (16.84%)
2017	202人 (53.72%)	2017	56人 (14.89%)
2018	213人 (49.77%)	2018	82人 (19.16%)
2019	229人 (57.83%)	2019	64人 (16.16%)
合計	908人 (54.02%)	合計	283人 (16.84%)

「当てはまる」と答えた学生は2016年は54.89%、2017年は53.72%、2018年は49.77%、2019年が57.83%、平均で54.02%の学生が「よく冗談を言うタイプ」だと回答している。

では「よく喋る」ことと「よく冗談を言う」ことの関係性はどうか。(表⑭)

表⑭ あなたはよく喋るタイプですか？×あなたはよく冗談を言うタイプですか？

	Q1/Q7	1	2	3	4	5	
無口	1	6	2	3	3	5	47
	2	8	31	41	21	4	9.77%
	3	1	15	57	44	16	
	4	3	12	27	79	31	171
よく喋る	5	1	2	8	15	46	35.60%
2017	言わない					よく言う	
	Q1/Q7	1	2	3	4	5	
無口	1	1	4	4		3	32
	2	7	20	26	19	4	8.51%
	3	1	12	54	40	10	
	4	1	5	24	53	19	126
よく喋る	5		5	10	11	43	33.51%

2018		言わない			よく言う			
	Q1/Q7	1	2	3	4	5		
無口	1	3	5	4	0	1	40	
	2	7	25	29	14	4	9.41%	
	3	1	20	70	53	16		
よく喋る	4	4	12	20	48	19	122	
	5	2	3	10	21	34	28.71%	

2019		言わない			よく言う			
	Q1/Q7	1	2	3	4	5		
無口	1	4	4	1	5	3	28	
	2	3	17	20	15	2	7.09%	
	3	6	16	49	42	20		
よく喋る	4	1	7	26	48	26	141	
	5	2	4	7	21	46	35.70%	

合計		言わない			よく言う			
	Q1/Q7	1	2	3	4	5		
無口	1	14	15	112	8	12	147	
	2	25	93	89	69	14	8.40%	
	3	9	63	230	179	62		
よく喋る	4	9	36	97	228	95	560	
	5	5	14	35	68	169	32.00%	

「よく喋り、しかもよく冗談を言う」学生は2016年が35.60%、2017年が33.51%、2018年は28.71%、2019年は35.70%、4か年平均は32.00%であった。つまり追大生の3割強が「よく喋り、しかもよく冗談を言う」ということである。

では前出の「家族を笑わせますか?」と「よく冗談を言うタイプですか?」の関係はどうだろうか。(表②)

表② あなたはよく冗談を言うタイプですか?×家族を笑わせますか?

2016		笑わせない			笑わせる			
	Q7/Q6	1	2	3	4	5		
言わない	1	7	6	4	2	0	45	
	2	7	25	17	12	1	9.36%	
	3	8	25	58	36	9		
よく言う	4	11	19	36	71	25	168	
	5	9	9	12	31	41	34.93%	

2017		笑わせない			笑わせる			
	Q7/Q6	1	2	3	4	5		
言わない	1	3	1	4	2	0	30	
	2	3	23	16	3	1	7.98%	
	3	8	16	58	29	7		
よく言う	4	5	17	35	48	18	124	
	5	5	3	13	21	37	32.98%	

2018		笑わせない					笑わせる	
	Q7/Q6	1	2	3	4	5		
言わない	1	1	6	6	2	1		33
	2	10	16	27	11	1		7.75%
	3	4	24	57	34	13		
よく言う	4	5	17	44	56	17		127
	5	3	3	14	25	29		29.81%
2019		笑わせない					笑わせる	
	Q7/Q6	1	2	3	4	5		
言わない	1	7	2	5	2	0		28
	2	2	17	15	10	3		7.09%
	3	6	12	35	38	12		
よく言う	4	4	11	30	69	18		163
	5	2	5	14	24	52		41.27%
合計		笑わせない					笑わせる	
	Q7/Q6	1	2	3	4	5		
言わない	1	18	15	19	8	1		136
	2	22	81	75	36	6		8.20%
	3	26	77	208	137	41		
よく言う	4	25	64	145	244	78		582
	5	19	20	33	101	159		35.10%

2016年が34.93%、2017年が32.98%、2018年が29.81%、2019年が41.27%、平均で35.10%が「よく冗談を言い、しかも、家族を笑わせる」のである。

では「よく冗談を言うタイプ」に家族とは限定せずに、広く「人を笑わせるのが得意」かと問うとどうだろうか。(表㉓)

表㉓ あなたはよく冗談を言うタイプですか？×人を笑わせるのは得意ですか？

2016		苦手					得意	
	Q7/Q12	1	2	3	4	5		
言わない	1	15	2	2	0	0		67
	2	19	31	9	3	0		13.93%
	3	21	46	60	8	1		
よく言う	4	11	37	86	26	2		73
	5	10	9	38	24	21		15.18%
2017		苦手					得意	
	Q7/Q12	1	2	3	4	5		
言わない	1	7	2	1	0	0		44
	2	14	21	10	1	0		11.70%
	3	10	40	58	7	3		
よく言う	4	4	33	59	22	0		65
	5	3	6	32	19	19		17.29%

2018		苦手					得意	
	Q7/Q12	1	2	3	4	5		
言わない	1	9	5	3	0	0		63
	2	15	34	13	3	0		14.72%
	3	14	62	51	4	2		
よく言う	4	2	32	76	24	5		67
	5	4	7	25	18	20		15.65%
2019		苦手					得意	
	Q7/Q12	1	2	3	4	5		
言わない	1	8	2	3	0	3		49
	2	12	27	8	1	0		12.37%
	3	13	33	48	5	4		
よく言う	4	14	30	70	17	1		69
	5	10	8	28	30	21		17.42%
合計		苦手					得意	
	Q7/Q12	1	2	3	4	5		
言わない	1	39	11	9	0	3		223
	2	60	113	40	8	0		13.27%
	3	58	181	217	24	10		
よく言う	4	31	132	291	89	13		274
	5	27	30	123	91	81		16.30%

これに「当てはまる」つまり「よく冗談を言い、人を笑わせるのが得意」な学生は2016年が15.18%、2017年が17.29%、2018年が15.65%、2019年が17.42%、4か年平均では16.30%であった。

以上の結果から、よく冗談を言い、家族を笑わせることができても、他人を相手に笑わせることは難しいと言えることができる。

2-2 受動的な「笑い」

次に受動的な「笑い」について考えてみたい。「笑わせる」という能動的な行為に対して、何らかの要因（ユーモア）によって「笑われる」、つまり受動的な結果としての「笑う」という行為のことである。

この「笑う」という行為に関して学生はどう自己分析しているのだろうか。

「あなた自身はよく笑うタイプですか？」(表④-a)との問いには、4か年で大差はなく平均で72.42%が「当てはまる」と回答している。7割強の学生がよく笑うのである。

表④-a あなた自身はよく笑うタイプですか？

2016	笑わない	1	2	3	4	5	笑う
		5	37	91	157	179	
		1.10%	7.90%	19.40%	33.50%	38.20%	
2017	笑わない	1	2	3	4	5	笑う
		3	30	63	119	154	
		0.80%	8.10%	17.10%	32.20%	41.70%	

2018	笑わない	1	2	3	4	5	笑う
		3	32	87	114	182	
		0.72%	7.66%	20.81%	27.27%	43.54%	
2019	笑わない	1	2	3	4	5	笑う
		7	30	66	110	177	
		1.79%	7.69%	16.92%	28.21%	45.38%	
合計	笑わない	1	2	3	4	5	笑う
		18	129	307	500	692	
		1.09%	7.84%	18.65%	30.38%	42.04%	

笑う		笑わない	
2016	336人 (71.64%)	2016	42人 (8.96%)
2017	273人 (73.98%)	2017	33人 (8.94%)
2018	296人 (70.81%)	2018	35人 (8.37%)
2019	287人 (73.59%)	2019	37人 (9.49%)
合計	1192人 (72.42%)	合計	147人 (8.93%)

良好なコミュニケーションの構築において「笑い」は、相手を「笑わせる」と言う行為だけではなく、相手への気遣いであり、傾聴のリアクションでもある「笑う」という行為も重要である。

では、この「よく笑う」行為には、男女の差があるのだろうか。一般的には女性の方が男性よりよく笑うといわれているが、4か年平均でやはり女性の方が18%高い結果が出ている。(表24-b)

表24-b あなた自身はよく笑うタイプですか？男女別

笑わない	1	2	3	4	5	笑う
	11.83%			60.80%		
【男性】	13	93	182	283	325	
【女性】	4	29	113	200	342	
	4.80%			78.78%		

また前述のように、コミュニケーションには時と場合によって相手への気遣いである「愛想笑い」も必要である。そこで「あなたは人の冗談に対して好意的に笑う方ですか？」と聞いてみた。(表25-a)

表25-a あなたは人の冗談に対して好意的に笑う方ですか？

2016	好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
		7	31	141	183	114	
		1.50%	6.50%	29.60%	38.40%	23.90%	
2017	好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
		4	12	98	158	104	
		1.10%	3.20%	26.10%	42.00%	27.70%	

2018	好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
		8	28	117	174	95	
		1.90%	6.64%	27.73%	41.23%	22.51%	
2019	好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
		11	16	104	154	107	
		2.81%	4.08%	26.53%	39.29%	27.30%	
合計	好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
		30	87	460	669	420	
		1.80%	5.22%	27.61%	40.16%	25.21%	

好意的		好意的でない	
2016	297人 (62.39%)	2016	38人 (7.98%)
2017	262人 (69.68%)	2017	16人 (4.26%)
2018	269人 (63.74%)	2018	36人 (8.53%)
2019	261人 (66.58%)	2019	27人 (6.89%)
合計	1089人 (65.37%)	合計	117人 (7.02%)

「当てはまる」と回答した学生は4か年で大きな差はなく、平均で65.37%の学生が「好意的に笑う」と言う結果であった。

笑わすことができるということは、円滑なコミュニケーションを図るうえで非常に有効なスキルであることは言うまでもないが、笑わせなくとも、好意的に笑うことは重要な行為でありマナーである。

では、「好意的に笑う（愛想笑い）」ことにどのくらいの男女差があるだろうか。（表㉔-b）

表㉔-b あなたは人の冗談に対して好意的に笑う方ですか？

好意的でない	1	2	3	4	5	好意的
	14.38%			58.13%		
【男性】	20	49	132	178	101	
【女性】	9	36	174	280	193	
	6.50%			68.35%		

男女比の4か年平均を比べてみると、男性に対して女性の方が約10%上回っている。つまり、女性の方が愛想笑いが多いということであろう。

困みに「笑う」と「笑わせる」ことの関係性はどうか。つまり「自分はよく笑うタイプでありながら人を笑わせるのも得意」ということである。（表㉔）

表② あなた自身はよく笑うタイプですか？×笑わせるのは得意ですか？

2016		苦手					得意		
	Q9/Q12	1	2	3	4	5			
笑わない	1	3		0	1	1		33	
	2	17	13	6	1	0		7.04%	
	3	18	27	42	3	1			
笑う	4	19	48	67	22	1		74	
	5	19	32	77	32	19		15.78%	
2017		苦手					得意		
	Q9/Q12	1	2	3	4	5			
笑わない	1	2		1	0	0		24	
	2	10	12	6		2		6.50%	
	3	5	24	30	3	1			
笑う	4	8	32	58	18	3		68	
	5	12	32	63	27	20		18.43%	
2018		苦手					得意		
	Q9/Q12	1	2	3	4	5			
笑わない	1	2	1	0	0	0		23	
	2	7	13	9	2	1		5.50%	
	3	12	33	34	5	3			
笑う	4	9	36	52	14	3		63	
	5	13	53	70	26	20		15.07%	
2019		苦手					得意		
	Q9/Q12	1	2	3	4	5			
笑わない	1	3	0	2	0	2		24	
	2	7	14	7	2	0		6.15%	
	3	18	16	28	2	2			
笑う	4	9	37	52	10	2		74	
	5	19	31	65	39	23		18.98%	
合計		苦手					得意		
	Q9/Q12	1	2	3	4	5			
笑わない	1	10	1	3	1	3		104	
	2	41	52	28	5	3		6.72%	
	3	53	100	134	13	7			
笑う	4	45	153	230	64	9		279	
	5	63	148	175	124	82		18.03%	

4か年平均で18.03%が「自分もよく笑い、かつ、人を笑わせるのが得意」と言うことである。「笑わせる」だけでなく「自分も笑う」ということは、円滑なコミュニケーションを図る上では非常に好ましいことである。

3. 芸能と「笑い」

3-1 古典芸能への理解

古典芸能を理解することは文化の継承はもとより、言語としての古い日本語が理解できるだけでなく、伝統的

に受け継がれた「言葉遊び」や「洒落」を理解することでもある。また、日本固有の伝統的な「笑い」、換言すれば途絶えることのない「日本の普遍的な笑い」が理解できるということである。

以下の表は古典芸能と言われるものに対する経験（接触）の差異を調べた結果である。（表⑳）

表㉑ あなたは以下に挙げた芸能を授業（過去も含めて）以外で見たことがありますか？

2016			1	2	3	4	5	
	落語	全くない	149(31.1%)	112(23.4%)	107(22.3%)	94(19.6%)	17(3.5%)	よくある
	能・狂言	全くない	269(56.4%)	93(19.5%)	72(15.1%)	37(7.8%)	6(1.3%)	よくある
	歌舞伎	全くない	273(57.4%)	95(20%)	70(14.7%)	30(6.3%)	8(1.7%)	よくある
	文楽	全くない	274(57.4%)	95(20%)	71(14.9%)	31(6.5%)	6(1.3%)	よくある
2017			1	2	3	4	5	
	落語	全くない	150(39.8%)	63(16.7%)	85(22.5%)	62(16.4%)	17(4.5%)	よくある
	能・狂言	全くない	236(62.6%)	65(17.2%)	53(14.1%)	16(4.2%)	7(1.9%)	よくある
	歌舞伎	全くない	247(65.5%)	58(15.4%)	52(13.8%)	13(3.5%)	7(1.9%)	よくある
2018			1	2	3	4	5	
	落語							
	能・狂言	全くない	191(44.5%)	74(17.2%)	85(19.8%)	60(14.1%)	19(4.4%)	よくある
	歌舞伎	全くない	293(68.5%)	66(15.4%)	50(11.7%)	16(3.7%)	3(0.7%)	よくある
		全くない	281(66%)	74(17.4%)	47(11%)	17(4%)	7(1.6%)	よくある
2019			1	2	3	4	5	
	落語	全くない	194(49.4%)	71(18.1%)	67(17.0%)	38(9.7%)	23(5.9%)	よくある
	狂言	全くない	269(68.6%)	53(13.5%)	42(10.7%)	16(4.1%)	12(3.1%)	よくある
	歌舞伎	全くない	265(67.3%)	54(13.7%)	39(9.9%)	23(5.8%)	13(3.3%)	よくある
合計			1	2	3	4	5	
	落語	全くない	684(40.8%)	328(19.6%)	344(20.5%)	254(15.2%)	66(3.9%)	よくある
	能・狂言	全くない	1067(63.7%)	277(16.5%)	217(13.0%)	85(5.1%)	28(1.7%)	よくある
	歌舞伎	全くない	1066(63.7%)	281(16.8%)	208(12.4%)	83(5.0%)	35(2.1%)	よくある

4か年平均で「歌舞伎」「文楽（2016年のみ）」「能・狂言」とも見たことが「よくある」は5%にも満たない。比較的とつきやすい「落語」でも「当てはまる（4・5）」は20%に届かず、決して好ましい結果ではなかった。

3-2 「笑い」の傾向

最近の学生は、漫才やコントなど、所謂「お笑い芸」を生舞台どころか、テレビからでもなく、YouTubeで鑑賞することが多いようである。そこで、自分のお目当ての芸人を見つけるのだそうである。最早「お笑い芸」は舞台芸ではなく、ネット上のコンテンツのひとつとなってしまっているのだ。

そんな楽しみ方をしている学生に、3つの「笑い」パターンの中で好きなものはどれか問うてみた。（表㉒）

表⑳ 以下の3つの「笑い」パターンの中であなたが好きなものはどれですか？（複数回答）

2016	1	一発ギャグ系	109(20.4%)
	2	音楽ネタ系	113(21%)
	3	ダジャレや言葉の掛け合い系	312(58.4%)
2017	1	一発ギャグ系	114(25.3%)
	2	音楽ネタ系	86(19.1%)
	3	ダジャレや言葉の掛け合い系	251(55.7%)
2018	1	一発ギャグ系	120(24.1%)
	2	音楽ネタ系	97(19.5%)
	3	ダジャレや言葉の掛け合い系	281(56.4%)
2019	1	一発ギャグ系	108(23.3%)
	2	音楽ネタ系	98(21.2%)
	3	ダジャレや言葉の掛け合い系	257(55.5%)
合計	1	一発ギャグ系	571(23.7%)
	2	音楽ネタ系	491(20.3%)
	3	ダジャレや言葉の掛け合い系	1352(56.0%)

「一発ギャグ系」や「音楽ネタ系」は好みに差が目立つが、「ダジャレや言葉の掛け合い系」は4か年とも半数を超えていることがわかった。

次は笑芸のジャンルに関する設問である。

「あなたは下に挙げた『お笑い』の中でどれが一番好きですか？」（表㉑）

表㉑ あなたは下に挙げた「お笑い」の中でどれが一番好きですか？

2016	1	落語	13(2.7%)
	2	漫才	181(38.3%)
	3	コント	107(22.6%)
	4	ピン芸人（1人芸）	10(2.1%)
	5	バラエティー番組	138(29.2%)
	6	特になし	24(5.1%)
2017	1	落語	6(1.7%)
	2	漫才	130(35.8%)
	3	コント	73(20.1%)
	4	ピン芸人（1人芸）	9(2.5%)
	5	バラエティー番組	129(35.5%)
	6	特になし	16(4.4%)
2018	1	落語	9(1.8%)
	2	漫才	148(30.3%)
	3	コント	125(25.6%)
	4	ピン芸人（1人芸）	18(3.7%)
	5	バラエティー番組	165(33.8%)
	6	特になし	23(4.7%)

2019	1	落語		4(1%)
	2	漫才		135(33.5%)
	3	コント		64(15.9%)
	4	ピン芸人(1人芸)		9(2.2%)
	5	バラエティー番組		169(41.9%)
	6	特になし		22(5.5%)
合計	1	落語		32(1.9%)
	2	漫才		594(34.4%)
	3	コント		369(21.4%)
	4	ピン芸人(1人芸)		46(2.7%)
	5	バラエティー番組		601(34.8%)
	6	特になし		85(4.9%)

4か年で多少順位に違いはあるものの、「漫才」「バラエティー」「コント」が上位3位と、想定通りの結果であった。

4. 言葉と笑い

前項で示した学生の「笑い」の傾向を受ける形で、ほんの数例ではあるが、言葉遊びの理解度を試してみた。昔ながらの「しゃれことば」と単純な「ダジャレ」である。

「次に挙げた冗談(言葉遊び)のうち、面白いと思ったものに◎、理解できたが面白くないものに○、理解できなかったものに×を記入してください」という設問である。

1、ウサギの逆立ちや！ → 耳が痛い
2、ゆがんだ松の木や！ → 走らにやならぬ
3、男の子が池にはまった → ぼつつちゃーん
4、隣の家で困りができたで → へー
5、この井戸は深いか？ → ほんのソコまでや

結果は以下の通りである。(表⑩)

表⑩ 次に挙げた冗談のうち、面白いと思ったものに◎、理解できたが面白くないものに○、理解できなかったものに×を記入してください

2016		◎	○	×
	1	6	107	314
	2	11	95	320
	3	64	278	86
	4	40	290	98
	5	49	249	131

2017		◎	○	×
	1	7	90	232
	2	5	68	257
	3	51	221	55
	4	32	226	70
	5	50	197	78

2018		◎	○	×
	1	13	95	279
	2	6	86	292
	3	38	253	96
	4	30	249	103
	5	33	223	128

2019		◎	○	×
	1	6	87	266
	2	5	51	303
	3	44	234	83
	4	29	234	97
	5	20	225	115

合計		◎	○	×
	1	32	379	1091
	2	27	300	1172
	3	197	986	320
	4	131	999	368
	5	152	894	452

それぞれの言い草の理解度は以下の通りである。

1、ウサギの逆立ちや！（小言を言われたときに使う）→耳が痛い

	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
2016	6(1.41%)	107(25.06%)	314(73.54%)
2017	7(2.13%)	90(27.36%)	232(70.52%)
2018	13(3.36%)	95(24.55%)	279(72.09%)
2019	6(1.67%)	87(24.23%)	266(74.09%)

2、ゆがんだ松の木や！（急いでいるときに使う）→走（はし）らにやならぬ

	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
2016	11(2.58%)	95(22.30%)	320(75.12%)
2017	5(1.52%)	68(20.61%)	257(77.88%)
2018	6(1.56%)	86(22.40%)	292(76.04%)
2019	5(1.39%)	51(14.21%)	303(84.40%)

3、A「男の子が池にはまったらどんな音がする？」 B「ぼっちゃ〜ん！」

	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
2016	64(14.95%)	278(64.95%)	86(20.09%)
2017	51(15.60%)	221(67.58%)	55(16.82%)
2018	38(9.82%)	253(65.37%)	96(24.81%)
2019	44(12.12%)	234(64.82%)	83(22.99%)

4、A「隣の家に囲いができたで」 B「へー」

	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
2016	40(9.35%)	290(67.76%)	98(22.90%)
2017	32(9.76%)	226(68.90%)	70(21.34%)
2018	30(7.85%)	249(65.18%)	103(26.96%)
2019	29(8.06%)	234(65.00%)	97(26.94%)

5、A「この井戸は深いか？」 B「ほんのソコまでや」

	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
2016	49(11.42%)	249(58.04%)	131(30.54%)
2017	50(15.38%)	197(60.62%)	78(24.00%)
2018	33(8.59%)	223(58.07%)	128(33.33%)
2019	20(5.56%)	225(61.50%)	115(31.94%)

合計	面白いと思った	理解できたが面白くない	理解できなかった
1	32(1.46%)	379(25.23%)	1091(72.64%)
2	27(1.80%)	300(20.01%)	1172(78.19%)
3	197(13.11%)	986(65.60%)	320(21.29%)
4	131(8.75%)	999(66.69%)	368(24.57%)
5	152(10.15%)	894(59.68%)	452(30.13%)

擬音系のダジャレには理解を示すものの「面白くない」という反応であり、古典的な、所謂「しゃれことば」と言われるものは理解ができないようだ。特に、1の「ウサギの逆立ちや」は「耳が痛い」ということ自体が理解できていないのであろう。また、「ウサギの逆立ち」自体を真面目にとらえすぎているのであろう。「ウサギの逆立ちは見たことがない」などと受けとっているようで、「譬えの洒落」というものが最早理解されなくなっているようだ。

これだけの結果で軽々に判断することはできないが、環境の変化や言語文化の変容が語彙力の低下を招き、「駄洒落」に代表される伝統的な日本の「言葉遊び」に大きく影響を与えていることは間違いないであろう。

「駄洒落」に見られる日本語の特質である「同音異義」を楽しむようなものは、語彙力と理解力に頼らなければならず、文字離れが進む今日、また、パソコンやスマホで簡単に文字変換でき、言葉が記憶に残らないような環境では、ますます理解されなくなってゆき、やがて日本から「駄洒落」が消えてしまうのではないかと危惧する。

まとめ

4年間の経年調査報告のまとめにあたり、今一度、このアンケート調査の目的を確認しておく。

この調査は「ユーモアを解したコミュニケーション能力のある人材育成のための教育プログラムの開発」に資することである。そして、この調査では「ユーモア」を「笑い」と同義語として捉えることにしてきた。また、コミュニケーションにとって「笑い」が不可欠であるという前提で、学生に様々な質問を行った。

しかし、果たして追大生は（現代の若者は）「笑い」に関心があるのだろうか。元も子もない自問である。そこで、「人を笑わせられるようになりたい」と思っているのか。根本的な問いかけをした。（表③）

表③ 人を笑わせられるようになりたい

2016	思わない	1	2	3	4	5	なりたい
		34	58	147	140	100	
		7.10%	12.10%	30.70%	29.20%	20.90%	
2017	思わない	1	2	3	4	5	なりたい
		19	47	104	102	98	
		5.10%	12.70%	28.10%	27.60%	26.50%	
2018	思わない	1	2	3	4	5	なりたい
		23	51	140	107	103	
		5.42%	12.03%	33.02%	25.24%	24.29%	
2019	思わない	1	2	3	4	5	なりたい
		28	34	126	101	100	
		7.20%	8.74%	32.39%	25.96%	25.71%	
合計	思わない	1	2	3	4	5	なりたい
		104	190	517	450	401	
		6.26%	11.43%	31.11%	27.08%	24.13%	

なりたい		思わない	
2016	240人 (50.10%)	2016	92人 (19.21%)
2017	200人 (54.05%)	2017	66人 (17.84%)
2018	210人 (49.53%)	2018	74人 (17.45%)
2019	201人 (51.67%)	2019	62人 (15.94%)
合計	851人 (51.20%)	合計	294人 (17.69%)

2016年が50.1%、2017年が54.05%、2018年が49.53%、2019年は51.67%と、少なくとも半数以上の学生が「人を笑わせられるようになりたい」と望んでいるのである。決してこの調査が無駄ではなかったことは判った。

ここで、前出の「人を笑わせるのは得意ですか？」という設問を思い出してもらいたい。（表①7-a）

この設問に1もしくは2と回答、つまり「苦手」と回答した学生の結果と「あなたは人を笑わせたいと思えますか？」との関係を見てみよう。（表③）

表㉔ 人を笑わせるのは得意ですか？×あなたは人を笑わせたいと思いますか？

2016		思わない					笑わせたい	
Q12/Q14		1	2	3	4	5		
苦手	1	16	10	21	12	8	52	
	2	2	24	38	39	13	14.73%	
	3	1	6	51	32	26		
	4	0	1	6	12	20	46	
得意	5	0	0	1	0	14	13.03%	
2017		思わない					笑わせたい	
Q12/Q14		1	2	3	4	5		
苦手	1	3	10	11	6	5	37	
	2	4	20	37	27	10	13.65%	
	3	0	4	33	30	17		
	4	0	1	1	16	12	51	
得意	5	0	0	1	3	20	18.82%	
2018		思わない					笑わせたい	
Q12/Q14		1	2	3	4	5		
苦手	1	11	4	18	4	4	42	
	2	3	24	55	25	19	13.21%	
	3	1	1	39	45	21		
	4	0	3	1	13	13	40	
得意	5	0	0	0	2	12	12.58%	
2019		思わない					笑わせたい	
Q12/Q14		1	2	3	4	5		
苦手	1	5	9	24	5	9	35	
	2	4	17	34	24	13	11.36%	
	3	1	7	35	37	25		
	4	0	0	4	11	22	53	
得意	5	1	0	1	2	18	17.21%	
合計		思わない					笑わせたい	
Q12/Q14		1	2	3	4	5		
苦手	1	35	33	74	27	26	166	
	2	13	85	164	115	55	13.28%	
	3	3	18	158	144	89		
	4	0	5	12	52	67	190	
得意	5	1	0	3	7	64	15.20%	

人を笑わせるのが苦手と思っている者でも、人を笑わせたい気持ちはあるということが見て取れる。「人を笑わせるのが苦手で、しかも笑わせたいと思わない」が4か年平均166人（13.28%）に対して「人を笑わせるのが苦手だが笑わせたい」（破線で囲まれた数字）が223人（17.84%）で、苦手でも笑わせたい願望はあるという学生の方が多いことがわかった。

「どんな話にも笑いを求める」「話の終わりに必ずオチ無いのん？と言う」と思われているのが大阪人のステレオタイプである。しかし、これは代表的な大阪人の気質であると言っても過言ではないだろう。

そこで最後の設問はズバリ、「なんでも『笑い』にしようとする大阪気質は？」が好きか嫌いかである。（表㉔）

表③ なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？

2016	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
		21	53	127	144	134	
		4.40%	11.10%	26.50%	30.10%	28.00%	
2017	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
		18	18	110	110	115	
		4.90%	4.90%	29.60%	29.60%	31.00%	
2018	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
		12	26	129	134	123	
		2.83%	6.13%	30.42%	31.60%	29.01%	
2019	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
		10	25	110	121	125	
		2.56%	6.39%	28.13%	30.95%	31.97%	
合計	嫌い	1	2	3	4	5	大好き
		61	122	476	509	497	
		3.66%	7.33%	28.59%	30.57%	29.85%	

大好き		嫌い	
2016	278人 (58.04%)	2016	74人 (15.45%)
2017	225人 (60.64%)	2017	36人 (9.70%)
2018	257人 (60.61%)	2018	38人 (8.96%)
2019	246人 (62.92%)	2019	35人 (8.95%)
合計	1006人 (60.42%)	合計	183人 (10.99%)

2016年は479人中58.04%が、2017年は371人中60.64%が、2018年は424人中60.61%が、2019年は391人中62.92%が、4か年で1,665人中60.42%、1,006人の学生が「なんでも『笑い』にしようとする大阪気質」が好きなのである。因みに、4年間の回答者の出身が大阪か大阪以外か、下表を参照願いたい。

	大阪出身	大阪以外	合計
2016	252	230	482
2017	191	186	377
2018	230	202	432
2019	236	160	396
合計	909	778	1687

決して大阪出身者中心の結果ではなく、自他ともに容認された「大阪気質」なのである。

これまで4年間の調査結果を見てきたが、各年で結果に大きな差は見られなかったと言えよう。2019年度の学生が他の3か年の学生に比べると、コミュニケーションに関して積極的な志向を示しているように思われるが、その根拠は明らかではない。

4年間の結果を通して明らかになった追大生の特質としては、約45%がよく喋り、約75%が友人とよく喋り、約60%は家族とよく喋るということである。その反面、大勢の前では自信が減少し、喋ることができなくなる学生が

多いということも分かった。

昨年の報告にも記したように、ユーモアの心、言い換えるならば「笑いのセンス」を育てるには、「笑い」に対する理解が不可欠である。そして、日常に活かせる「笑い」は「言葉遊び」に多くのお手本がある。その「言葉遊び」は落語や漫才などの笑芸に学ぶことができる。しかし、それを理解するためには「語彙力」が必要となる。つまり、書籍であれ新聞であれ、活字に触れることが重要なのである。

授業の中でテキストを音読させることがあるが、漢字が読めない、熟語を知らない、声が小さい、つまり自信を持って読むことができない学生は決して少なくない。言葉に対する興味がなく、知らないことを恥ずかしいことと思わず、知ろうとすることへの意欲が感じられない学生が多い。

言葉に興味を持ち、人に興味を持ち、自分に自信を持てるようになることがコミュニケーション力アップのスタートである。そして、そのための教育が必要なのである。

付録

4年間の調査対象学生出身地

大阪府	909	熊本県	2
京都府	166	鹿児島県	1
兵庫県	276	沖縄県	3
滋賀県	87	福井県	6
奈良県	65	石川県	4
和歌山県	19	新潟県	2
三重県	3	長野県	3
岡山県	10	愛知県	7
広島県	14	静岡県	4
鳥取県	3	千葉県	1
島根県	1	神奈川県	2
山口県	1	栃木県	1
香川県	7	群馬県	2
徳島県	7	茨城県	1
高知県	11	東京都	3
愛媛県	11	青森県	1
福岡県	9	北海道	5
佐賀県	1	中国	7
大分県	1	香港	1
長崎県	2	不明	28
			合計1687

追手門学院大学・笑学研究所 「笑いに」に関するアンケート

このアンケートは、追手門学院大学「笑学研究所」が本学の学生を対象に行う「若者の笑い」に関する意識調査です。「笑う」という行動、「笑わせる」という行為など、円滑なコミュニケーション活動にとって大変重要な要素である「笑い」に関する研究の資料として、またコミュニケーションスキルアップのためのプログラム開発に活かすべく実施しますので、よく考えて回答にご協力ください。

男性	女性	年齢	歳	学部	出身地	都・道・府・県	市
<p>Q1 あなたはよく喋るタイプですか？ 無口 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく喋る</p> <p>Q2 あなたは大勢の前で喋るのは得意ですか？ 苦手 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 得意</p> <p>Q3 友人とよく喋りますか？ 喋らない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく喋る</p> <p>Q4 家族とよく喋りますか？ 喋らない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく喋る</p> <p>Q5 楽しい家庭ですか？ そうは思わない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 とても楽しい家庭だ</p> <p>Q6 家族を笑わせますか？ 笑わせない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 笑わせる</p> <p>Q7 あなたはよく冗談を言うタイプですか？ 言わない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく言う</p> <p>Q8 (Q7で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Q冗談をいう場合、その場の空気をよく考えますか？ 考えない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく考える</p> <p>Q9 あなた自身はよく笑うタイプですか？ 笑わない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく笑う</p> <p>Q10 (Q9で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Qどういふときによく笑いますか？なるべく具体的にお答えください</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div> <p>Q11 あなたは目立ちたがり屋ですか？ 控えめ <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 目立ちたがり</p> <p>Q12 人を笑わせるのは得意ですか？ 苦手 <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 得意</p> <p>Q13 (Q12で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Qあなたは漫才で言うどちらのタイプですか？ ツッコミ <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 ポケ</p> <p>Q14 (Q12で1, 2, を選んだ方のみお答えください) Qあなたは人を笑わせたいと思いますか？ 思わない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 笑わせたい</p> <p>Q15 あなたは人の冗談に対して好意的に笑う方ですか？ 好意的ではない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 好意的</p> <p>Q16 あなたは以下に挙げた芸能を授業(過去も含めて)以外で見たことがありますか？ 1. 落語 全くない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よくある 2. 狂言 全くない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よくある 3. 歌舞伎 全くない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よくある</p> <p>Q17 以下の3つの「笑い」パターンの中であなたが好きなものはどれですか？(複数回答可) 1. 一発ギャグ系 2. 音楽ネタ系 3. ダジャレや言葉の掛け合い系</p> <p>Q18 あなたは下に挙げた「お笑い」の中でどれが一番好きですか？ 1. 落語 2. 漫才 3. コント 4. ビン芸(一人芸) 5. パラエティー番組 6. 特になし</p> <p>Q19 あなたは言本新喜劇を見ますか？(テレビ、舞台どちらでも可) 全く見ない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 よく見る</p> <p>Q20 (Q19で3, 4, 5を選んだ方のみお答えください) Q好きな新喜劇の役者あるいはギャグを具体的にお答えください</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div> <p>Q21 あなたが好きな「お笑い芸人」ベスト3を挙げてください 1. _____ 2. _____ 3. _____</p> <p>Q22 次に挙げた冗談(言葉遊び)のうち、面白いと思ったものに◎、理解できたが面白くないものに○、理解できなかったものに×を口の中に記入してください 1. □ ウサギの逆立ちや！(小言を言われたときに使う)→耳が痛い 2. □ ゆがんだ松の木や！(急いでいるときに使う)→走(はし)らにやならぬ 3. □ A「男の子が池にはまったらどんな音がする？」 B「ぼっちゃ〜ん！」 4. □ A「隣の家に困いができたで」 B「へー」 5. □ A「この井戸は深いか？」 B「ほんのソコまでや」</p> <p>Q23 人を笑せられるようになりたい そうは思わない <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 とてもりたい</p> <p>Q24 なんでも「笑い」にしようとする大阪気質は？ 嫌い <input type="checkbox"/> 1 <input type="checkbox"/> 2 <input type="checkbox"/> 3 <input type="checkbox"/> 4 <input type="checkbox"/> 5 大好き</p>							

ご協力ありがとうございました
追手門学院大学・笑学研究所

2020 年度上方文化笑学センター活動記録

2020 年

- 6 月 18 日 第 1 回所員会議 於：Webex（オンライン）
7 月 9 日 第 2 回所員会議 於：Webex（オンライン）
9 月 13 日 日本笑い学会オープン講座（於：関西大学梅田キャンパス）
「狂言の笑い」講師：広瀬依子
9 月 24 日 第 3 回所員会議 於：Webex（オンライン）
10 月 1 日 第 4 回所員会議 於：Webex（オンライン）
10 月 29 日 第 5 回所員会議 於：Webex（オンライン）
11 月 4 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 5 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 11 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 12 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 18 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 19 日 笑学カフェ 於：本学研究所
11 月 19 日 第 6 回所員会議 於：Webex（オンライン）
12 月 2 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 3 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 9 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 10 日 中学生の研修受入れ（於：本学総持寺キャンパス）
公文国際学園中等部「日本文化体験お笑いコース」
12 月 16 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 17 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 23 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 24 日 笑学カフェ 於：本学研究所
12 月 24 日 第 7 回所員会議 於：Webex（オンライン）

2021 年

- 1 月 7 日 笑学カフェ 於：本学研究所
1 月 13 日 笑学カフェ 於：本学研究所
1 月 14 日 笑学カフェ 於：本学研究所
1 月 21 日 第 8 回所員会議 於：Webex（オンライン）
2 月 25 日 第 9 回所員会議 於：Webex（オンライン）
3 月 18 日 第 10 回所員会議 於：Webex（オンライン）

※笑学カフェの開催は授業期間中の水曜・木曜の昼休み

メディア掲載

- ・「四代にわたる芸を味わう この一冊（「文楽の家」竹本源大夫／鶴澤藤蔵【著】／田口章子【編】について執筆）」（広瀬依子 演劇界 8・9月号 2020.8.5）
- ・「裏方の仕事を語る 歌舞伎大道具師（書籍、「歌舞伎大道具師」釘町久磨次【著】／青土社について執筆）」（広瀬依子 演劇界 12月号 2020.11.5）

2020 年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧

センター長	高垣 伸博	国際教養学部 教授（マスコミ論、放送演芸論）
所 員	浦 光博	心理学部 教授（社会心理学）
所 員	佐藤 貴之	国際教養学部 講師（日本近現代文学）
所 員	辰本 頼弘	社会学部 教授（スポーツ科学）
所 員	広瀬 依子	国際教養学部 講師（上方芸能、伝統芸能）
所 員	横田 修	社会学部 准教授（演技・演劇教育論）
客員研究員	大坂 幸司	追手門学院大学校友会 理事
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾 塾長、NPO 発達障害を持つ大人の会（DDAC）監事、 （元・MBS ラジオ報道部長）
客員研究員	木村 未来	国際教養学部 非常勤講師、元・読売新聞文化芸術部記者
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学 兼任講師、桜美林大学 非常勤講師、日本笑い学会 理事
客員研究員	鳶野 克己	立命館大学 教授、日本笑い学会 副会長
客員研究員	福山 侑希	藍野花園病院 臨床心理士
特別顧問	坂井東洋男	追手門学院大学 学事顧問、元学長
特別顧問	西上 雅章	通天閣観光（株） 代表取締役会長、追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学上方文化笑学センター規程

令和2年2月17日

制定

(設置)

第1条 追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学（以下「本学」という。）に、上方文化笑学センター（以下「センター」という。）を設置する。

(目的)

第2条 センターは、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、学問・文化の集積拠点となり、教育・研究活動の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いを中心とした上方文化に関する情報発信
- (2) 笑いとユーモアを活用した教育プログラムの開発
- (3) 上方芸能及び笑いの文化に関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関する事。
- (4) 講座、講演会、シンポジウム等の開催
- (5) その他センターの運営に関する事。

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。
- 4 センター長の任期は、4月1日から2年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(所員)

第5条 センターに、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第6条 センターに、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者をセンター長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第7条 センターに、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、センター長の推薦により学長が任命する。
- 3 特別顧問は、センターの事業推進についてセンター長に助言等を与える。

(事務の所管)

第8条 センターに関する事務は、学長室の所管とする。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、2020年4月1日から施行する。
- 2 追手門学院大学笑学研究所規程（2015年9月4日制定）は、2020年3月31日をもって廃止する。

附 則

この規程は、2020年4月1日から施行する。

追手門学院大学上方文化笑学センター年報 第1号

2021年3月30日発行

発行者：追手門学院大学上方文化笑学センター
〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番地15号
TEL：072-665-5024

印刷所：友野印刷株式会社
〒700-0035 岡山市北区高柳西町1-23
TEL：086-255-1101
